昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅九年十二月一日発行卅九年十二月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通刊四五一号

# 川柳雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No.451

麻生路郎☆画

十二月号

川柳雑誌社主催

# 忘年川柳大会

句の総決算の日です。
一人のこらずご出席ください。

**日時** 十二月六日（日）午後一時
**会場** 自安寺（〔211〕一四七八番）
大阪市南区千日前電停スグ北側

司会　西田柳宏子
挨拶　若本多久志
**兼題**「姐」（二句）　麻生路郎選
「夜風」（三句）　北川春巣選
「時間潰し」（三句）　川村好郎選
「一流」（三句）　傍島静馬選
**席題**　三題（当日発表）
**柳話**　西尾栞
**支部対抗戦**　各支部選手
**雪月花句戦**　出席者全員
**呈賞**　☆各題天、地、人、☆各題天位から路郎選により不朽洞賞・支部対抗戦優勝者・準優勝者及び雪月花戦一位の組に川雑賞
**余興**　出席者有志
**会費**　百五十円
★投句だけの方は郵券三十円同封
（〆切十二月三日）
★忘年懇親宴——閉会後・同会場で会費七百円

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
**川柳雑誌社句会部**
電・大阪(691)六〇八一

**1月本社句会予告**
遠藤一本槍　甘しっけ相うけ　"兼題"


えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰（化粧ケース入）一、八リットル詰・一、二〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘　西宮酒造　醸

# 歳末の言葉

一九六四年を回顧すると、病軀をひっさげて、よくも闘って来たと思う。ことしはオリンピックの聖火が全国の村から街までを揺がせたが、柳壇もそうあってほしいと思った。そしてアベべのようなたくましい柳人が出てくれたらと思った。その時はビリでも走りつづけたあの男に私がなっても悔いはない。

（路）

## 川柳雑誌★十二月号目次


題字…麻生路郎・表紙…野尻弘

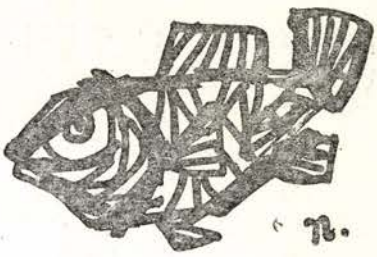
歳末の言葉……麻生路郎……(3)
川柳名句抄の鑑賞……麻生路郎……(4)
川柳にあらわれた成人病（下）……若林草右……(30)
現代柳人録……(19)続・川柳書架……(16)
川傍柳初編研究（三）……丸十府・岡田甫・川端柳風・高須啞三味・前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄……(12)
川雑婦人友の会十周年の集い……(26)
北京の焼餅君……東野大八……(16)
日東里逝く……(35)

集特妻を語る……高須啞三味・北川春巣・大鶴喜由・市場没食子・若本多久志・橘高薫風子……(22)

大阪文化祭川柳大会の入賞句……(38)
江戸川柳と紋章（一）……阿達義雄……(28)
高浜虚子と脇宝生……宇和川木耳……(34)
柳志寸言……本多柳志……(18)
栢筵・蓼太・一茶……冨士野鞍馬……(25)
大万川柳「つけ落ち」発表……(39)
不朽洞の人々……日満氏の巻……(41)

★

川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(16)
近作柳樽……麻生路郎選……(18)
人生譜……北川春巣選……(32)
金泥集……河野春三選……(29)
各地柳壇……麻生葭乃選……(42)
★柳界展望……(40)
★不朽洞会から……(39)
「独学」……大西八歩選
一路集「身持ち」……八木摩天郎選……(36)
「おしゃべり」……小浜牧人選……(46)
★柳樽室……路郎生（46）
★社の黒板……(46)



# 川柳 名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔一二八〕

**銀貨切手政府は並ばすのがお好き**

（好祐）

オリンピック記念千円銀貨の第一回引き替えが十月二日朝。全国の銀行、郵便局、農協など金融機関の窓口で一斉に行なわれた。大阪の中央郵便局だけでも引き替え開始の午前九時前から四千人を越す人波が続き、局内に二重、局の前に三重の行列が折れまがって延々と続き、一番乗りは前夜の九時からがんばったそうだ。こんなバカらしい情景を、作者は、「政府は並ばすのがお好き」と軟らかい言葉で批判しているが、軟らかければ軟らかいほど皮肉味が横溢していて役人には痛い句となっている。千円銀貨をメダルにしたり、帯止めにしたり、他の目的に使用するのは通貨を軽視するものでアタマのレベルの低さが思わされる。六千円で売れるからというがめつさにいたっては論外である。

〔一二九〕

**チヤンバラの剣に倒れた曼珠沙華**

（旭童）

曼珠沙華は彼岸ばなとも言って、赤い花だが何んとなく淋しい花だ。田ン圃のアゼや土堤や墓場の横に咲いているからであろうか。それだけでもなさそうだ。赤い花だが毒々しさはない。何んとなく弱々しい花だ。なよなよとした佳人にも等しい花だ。それがこの句では農家のいたずらっ子のチヤンバラと取ッ組んで対照の妙をなしている。

〔一三〇〕

**妻が席取って待つ程老いにけり**

（七面山）

老妻が、人におされながら車内に這入り、おされた勢いで、まろびながらも席を取ることを忘れない。女の執念て怖ろしいものだ。

「おとうさん、ココ、ココ」と老妻は手を挙げて夫を呼ぶ。老妻にはまだまだ多少の色気が残っているのであろうか。さすがにおじいさんとは呼ばない。斯うして、老妻が、取ってくれた席に辛うじておさまることが出来たが、考えて見りゃ、オレも年をとったものだと感慨を漏らした句で、確かに老人心理をつかんでいる。

〔一三一〕

**メダルには目もくれずビリゴールイン**

（旅風）

オリンピックの時、余裕綽々とゴールインしたエチオピヤのアベベにも感心したが、それにもまして、メダルを取ろうなどとは、テンデ念頭になく、アベベから一時間余も遅れても、投げてしまわずに、ただ一人走ってビリでゴールインした男を偉いと思った。この句の作者も、その点に眼を見張ったのであろう。

〔一三二〕

**お役所の人情汚職まで庇い**

（日満）

お役所の人情も特別なもので一つの発見であろう。汚職事件だなんて、あんなことは誰でもやってることなんだ。あいつ、運が悪かったんだとよく聞かされる。そして、それ以上に拡がらぬようになるべくウヤムヤに、ボカスことに骨を折ってやるのが役所の人たちの人情と言うものらしい。この人情の中には自分等の行動に火のつくことを怖れた防禦もふくまれた人情なのである。そこが普通の人情と違うところだ。そんな時にはお互いに椅子を争って足を引っぱったことなどはケロリと忘ているのもお役人の生き方なのである。の句は作家のけい眼が生んだもの。

〔一三三〕

**役員章つければ大人よく動き**

（雄声）

この句をジッとみつめていると、バカバカしい感じがしないでもない。会場を右往左往する人たちが、大きな菊花やバラの役員章をつけて、さも得意そうに、足どりも早く立ち働らいているのを見て第三者の批判的な句となったものである。たしかに「大人よく動き」に違いないよ、それを単に役員章をつければと見るのは半分当たっていて、半分は当たっていないと言えるのではなかろうか。筆者なども、時々このバカデカイ菊花やバラの役員章を美しい女性の手によって、胸に飾られることがあるが、そのために、よく動くという意識は働かない。まして役員章をうれしがるほどの子どもらしさも持ち合わさない。そんなキ章があってもなくっても働らくだけは働いている。議員章などをつけて得々としているのは議員の一年生ぐらいのものではないかと

思うが、どんなものであろう。しかしこの句からいろんな感想の浮ぶことだけは確かだから面白い句だと言っておこう。

〔一三四〕

**一箱の名刺まだある平社員**

（不　二）

会社へ入社すると、役職によっては直ぐに名刺を刷って渡される。会社のマークなどが浮きぼりにされた名刺を渡されると、一寸うれしくなるものらしく、別に名刺を渡すほどの人でなくても、「どうぞよろしく」などと言って渡すものだ。

ところが、外交員でないかぎり、平社員では、そうそう毎日名刺の要る人達に面接するものではないから、一箱の名刺がなかなか減らない。そこをとらえたのがこの句である。「まだある」がこの句のいのちで軽い穿ちの句だ。

〔一三五〕

**ただ穫れるように栗送れ柿送れ**

（可　住）

郷里を離れた弟妹が東京や大阪にいる。彼等のアルバイトの勉学生活も決してラクではない。真逆の時は郷里の老いたる父母や土にかじりついている兄や姉が唯一のたのみのツナである。金を送れと言っても送れぬことは百も承知である。せめて裏山の栗や庭先の柿を送れと言ってやるのであろう。ところが、それすら、拾うたり、もいだりする時間が要る。その時間のない、忙しい貧農なのだと言うのであろう。句のウラに農村生活の苦しみの浮かびあがって来ることを思わなければ、この句はただことを短詩型で表わしたに過ぎないと言える平凡なものとして看過ごされるだろう。

〔一三六〕

**建てるまではほしがりません共稼ぎ**

（八　郎）

従来は共稼ぎと言えば、夫ひとりの収入では食っていけないので、妻を働かせたものであった。だから共稼ぎは名誉にならないので、なるべく秘したものだ。ところが戦後の日本では、共稼ぎがハンランした。そして生活を豊富にすることを目標にしたためこんどは消費経済が膨張した。この句は家を建てるまでは、宝石や衣類などを欲しがりませんという妻の覚悟を詠んだ共稼ぎの句だ。句の構成は「勝つまでは欲しがりません」という、戦時の標語からの引用句である。

〔一三七〕

**人生一巻の終りペシャンコに轢れ**

（丁　路）

昔は一歩門へ出ると七人の敵があると言われたものだが、近ごろは一歩門へ出ると、酔っぱらい運転のトラックや自動車が何台暴走しているか判らない。エライ世の中になったものだ。

この句のように、ペシャンコに轢かれて人生一巻が終わりをつげるのでは、たまったものではない。せっかくこの世に生を享けた以上はお互いの人生をもっと大事にしたいものである。

〔一三八〕

**おしゃべりをいっきにさろう消防車**

（光　郎）

放送局と名がつかぬまでも、女というものはとかくおしゃべりなものだ。向かい三軒両隣りの奥さんたちが、一寸門へ出て鉢合わせをしたが最後、話題はご近所の噂からはじまって、とどまるところを知らないのが常だ。

ところが、そんな時に、たまたま消防車が警笛を鳴らして過ぎようものなら、どんなおしゃべりでも、いっきにさらってしまうものだと言うのである。それに違いないところに、この句には穿ちがある。

〔一三九〕

**女らしくしようとすれば恋にされ**

（きさ子）

女性が女性らしくしようとすれば、恋にされてしまうというのであるが、はたしてそうであろうか。作家が女性なので、体験からこの句が生れたのだと主張されれば、そんなものですかねえと引き下がるより方法はないが、「女らしくしようとすれば」の女らしくとは、どんなことをしようとされるのか。「恋にされ」はそうした女性のうぬぼれも多少手伝っているのではなかろうかという疑問も持たないわけにいかないのである。はっきりと第三者に判らせるためには、もう少し具体化する必要がありはしないか。女性心理をのぞくのに面白い句だとは思うが、その点に多少の物足りなさがある。

〔一四〇〕

**運転をしとれば社長も運転手**

（方　大）

イヤ、合理的な句だと言ってしまえば、それまでだが、何かを風刺しているようにも思えて面白い句だ。

アハハハと社長の大きな笑い声も聞えて来て、なかなかユーモラスな句だとも言えないことはないが、人によってはユーモラスどころかすこぶる理窟っぽい句だと反論を持ち出すかも知れない。いずれにしてもサムシングをつかんでいることだけは確かだ。


大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

近鉄2階特急

大阪—名古屋ノンストップ

2時間13分

大阪上本町発……毎時0分

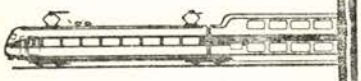
名古屋発…毎時30分

▶伊勢・名古屋ゆき

大阪上本町発…毎時15分

▶伊勢・大阪ゆき

名古屋発…毎時45分



特急券のお求めは21日前から近畿日本ツーリストと日本交通公社の各案内所

近鉄

# 川柳塔

## 麻生路郎選

西宮市　若本多久志

朝礼にシャレもとばして社長なり
定年を言渡す日の朝の冷え
外来語しみじみ老の身を悟り
サラリーマンになればよかった年の暮

高槻市　若柳潮花

ホームバーきのうも今日も女客

大阪府　西いわを

先生の呼名社交のものとなり
お便りをきっと頂戴少女趣味
オリンピック鳩の行く方を見守りぬ

大阪市　北川春巣

定退は故郷に家のある強み
腕時計修繕中で日が長し
赤い羽根自家用族は素通りし
お焼香ぎりぎりに来てせわしがり

ホノルル市　市岡暁舟

ジンヂャーの香り布哇という感じ
お土産はメードインジャパンで済しとき
古里の便り押し花も添えてあり

ハワイ　羽佐間柳葉

若い娘の電話時間を度外しし
一喝と思ったキューバに手を咬まれ
美容院自己陶酔の顔で出る

堺市　吉田圭井堂

食堂でねばった汽車はもうむかし
道問えば隣りで聞けと鎌を研ぐ

防府市　長野井蛙

未だ死ねぬ身を持て余す藁蒲団
太い足うっかりほめて気を損ね

岡山県　直原七面山

例え話を出して娘の気を探り
妻が席取って待つ程老いにけり

鳥取市　河村日満

聖火到着偏屈ばかり社に残り

新作傘踊り

観光へ生まれ変わった傘踊り

汚職続出に

お役所の人情汚職まで庇い

倉敷市　木村千容

知事さんの角膜で見る赤トンボ
敬老へ反骨顔を出さぬなり
とりまきがあまやかしとる自信過多

倉敷市　田垣方大

忽然と街をこさえる大資本
運転をしとれば社長も運転手
汽車弁を食べるに背中むけあって
手の荒れを気にして農夫背広着る

加賀市　野村味平

鍵かけてそれで不安な金庫番
長ばなししておしんこで昼にする

高槻市　福田丁路

金溜めて悪名高い爺々と婆々
人生一巻の終りペシャンコに轢れ

阿呆ぼんの瞞されそうで瞞されず
大阪市　後藤梅志

喜の祝でもしなさいと手術され
儲からぬ筈だ意見も三つに割れ
金メダル風呂の中まできこえて来
待たされるうちに個性の強さ知る
米子市　小西雄々

見送りの方が興奮しておらず
君が代を涙で聞いた金メダル
大阪市　山川阿茶

バッテラが半分ですむ年となり
がめつさの競争な人と生きとれず
加賀市　那谷光郎

金なくて何がおもろい懐手
おしゃべりをいっきにさろう消防車
浴衣着の散歩も署長四角張り
無心聞く入歯何度も落ちかゝり
大阪市　福井野迷路

予報課と医者の弱みはおどしすぎ
松ちゃんに天勝呂昇よい時代

もっと上手に云えぬかおべっか
どつかれてお辞儀さゝれた一と昔
岡山県　浜田久米雄

十二月善意の瞳探して見
来年の旅を今から誘いに来
たまさかに孫叱りたい気を起こし
出雲市　尼緑之助

オリンピック中でも動くもの動き
鳥取市　杉谷湖山

若い娘が隣りに座ってくれた汽車
ニュースだけ聞いてテレビは子に委かせ
八代市　佐野卜占

幻滅の悲哀は恋人度胸ゼロ
せゝらぎの音にも秋の深さ知り
京都市　大鶴喜由

日本はよかことを知る九十三
寝むれぬ夜好きだった娘の頭数
恋や恋見上げてくれる丈を撰り
ゼントルマンをけだものにするペチコート
門真市　福島鉄児

思いつめた眼に両親の無策なる
気の毒な話へ何んにもしてやれず
岡山市　服部十九平

連絡線故郷の山が晴れて見え
良妻のメモ御主人のサイズ書く
役人が飲めば汚職の匂がし
岡山県　大森娟句楽

薄い目で落穂勿体なく拾い
長屋とは云わぬアパートの狭さ
尼崎市　長谷川三司

薄情と言われてもてる男にて
運のない男しんなり指白し
霧に立てば女の顔の薄みどり
岡山県　田村藤波

老夫婦熟柿の高さに腰を伸し
これが五十円の大根ですと妻が見せ
台風がそれて晩酌飲みなおし
児島市　本田恵二朗

良い素質眠らせている学校差
渡辺二楽氏の喜寿を祝す

山しずか喜寿のほゝえみ慕われる

鳥取市　森本法泉子

京都御所拝観

赤松は明治のままの色に映え

金閣は昭和の色で落着かず

三十三間堂

千体の仏は右へならえをし

竜安寺わからぬまゝに坐ってみ

京都時代祭（三句）

巴御前舗道を蹴って勇ましい

淀君も京の雨には濡れて行き

アルバイト時計をはめた徒士が行く

オリンピックがすんで落語が面白い

堺市　高崎雄声

老兵未だ死せず輪タク運転手

猫よりましと婆さんに店の番

役員章つければ大人よく動き

島根県　藤井明朗

スマートを気にし味覚を楽しめず

母だけが味方別れる娘を送り

余生まだ太し六十で嫁もらい

倉敷市　野田素身郎

団体が着いて名園絵にならず

秋刀魚焼く煙へ末の子が飯り

芦屋市　丸川初甫

全権を握った顔は笑わない

たくましい愛は首まで握りしめ

岡山県　池田古心

着物はがれトウモロコシ肌さらす

通貨にもならぬに千円銀貨出し

大阪府　早川清生

冬の球場風はしる音

巡査部長機を見てやめる夢をもち

探険隊去り白人の胤残る

大阪市　橘高薫風子

吉本菁風君結婚

何よりのもの新妻の涼しき瞳

オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

神戸市　仲どんたく

舞扇持てば二十を取りもどし

税務署を値切ってくれたおやじ逝き

その頃を皆思い出す披露の宴

平田市　久家代仕男

縁先の月見話題は亡妻（つま）のこと

茶の味と菊と歌舞伎を見てもらい

柿渋を抜く母まるく樽に伏し

大阪市　本多柳志

大和路の秋

拝観料とれとはほとけのたまわず

月光菩薩さまもパリへ行きたかろ

大和路はどのカメラにも塔が立ち

団体の智恵でも読めぬ句碑が立ち

西宮市　野呂鵜汀

蓑虫のブラリ気楽な冬になり

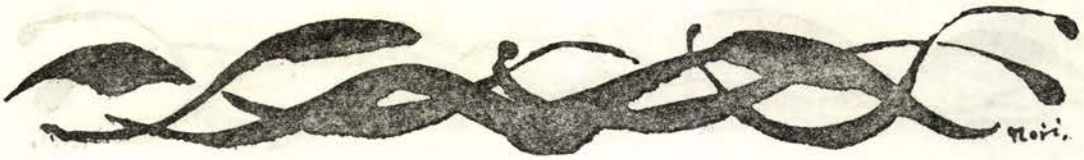
運ちゃんの若さが恐し絶景地

西宮市　樋口舟遊

闇すべてやがて女は着飾りぬ

化学万能女の下着すいて見え

双眼鏡十円分は那智の滝



新潟県　高野不二

一箱の名刺まだある平社員
一年がもうたちました赤い羽根
子に酌いでやって年には勝てぬ酒
電気釜だけ人間は又怠け

大阪市　石倉旅風

メダルには目もくれずビリゴールイン
泣き笑い東京五輪の決算書

大阪市　魚住満潮

続・西成界わい

浩の宮と瓜二つ日雇いの母の背に
今日明日の病人に法華の太鼓
共稼ぎ二度目も墮胎(おろ)すことにする
新聞を燃やして立ちん坊暖をとり
非行娘(ずべこ)と云われ高校首席で出

愛媛県　村上旭童

チャンバラの剣に倒れた曼珠沙華
ばかでかい家に小さく農夫すみ

鳥取県　福田多可志

県境で聖火おごそかにキッスする

高槻市　傍島静馬

商署の結婚式がどぎつ過ぎ
無量寺からいづもやへ来て腰延ばし
無理云うて泊った宿の茶がぬるし

大阪市　河井庸佑

思いきり遊んだ友が合格し
御期待にそえぬ子供に育って来
踏み台にされているとは知りながら
程々がええと強がり言うており
人事院勧告物価またあがり

大阪府　谷沢好祐

スポーツも見る方ばかりになって来た
母ちゃんの水着は買うただけでした
顔色でお布施の過多を読んで見る
銀貨切手政府は並ばすのがお好き

青森市　工藤甲吉

信仰の自由を母に叱られる
既成品みたいオールドミスでいる
今もある孝子の話ホロリ聞く
役所から忘れた頃に返事来る

ベニヤの棺死んでしまえばそれまでか

京都市　室井八九寸

担任とママの合作第一位
ストリップ温泉医者は木戸ご免
聖火追いこして台風京に入る

岡山県　横山一声

保険の額だけ借金をして死に
借金があるとは言わぬ自家用車

小松市　関戸宗太郎

怪我人がなくて自動車惜しくなり
倒産の鉄屑さえも落ちとらず
痛くないデットボールのような役

石川県　高山涼髪

父酔うて母とのロマンスちともらし
どしゃ降りのあとの星空君恋し
県議長競馬が趣味とはさびし

美濃市　安平次弘道

風に呼び止められそうな一人旅
正論を頑固者にされるのも歳か
瀬戸は凪渡船の丸い丸い煙

事故皆無交通係は倍疲れ

愛媛県　渡辺暁童

自分を自分で粗末にしたがる若さ
金が出来たと言えば本当にしてくれる

宇部市　平田実男

夕焼の詩情をジエット機が奪い
大臣を仲間に持って女将肥え
実力の蔭にお百度踏んだ母
貸した金よりも無沙汰が勘に触れ
貯めてから一層サザエのようになり

富田林市　浅川八郎

古暖簾頭の切り替え遅そすぎた
建てるまではほしがりません共稼ぎ

岸和田市　内藤きさ子

花札へダイヤの指がよく動き
気をつかいすぎて舌禍となって果て
女らしくしようとすれば恋にされ
何というわびしさ野良犬の片眼
菊と着物日本の秋にしてくれる

青森県　木村涼人

勲章をくれて供養をしたつもり
太刀持ちのように聖火は腕を張り
経済のひずみ晩酌減らされる

芦屋市　唐崎専翁

エジプトにて

太陽と砂漠ナセルの覇気と燃え
目と口と耳がキキたい事だらけ

ウエストミンスターチャーチにて

戴冠の皇帝椅子に座してみる
国連の壁画民主の素晴らしさ

パリーにて

革命の広場でベビーと和む午後

倉敷市　奥谷弘朗

大衆の声を漫画で訴える
我家(クチ)だけが国旗を出した五輪の日

姫路市　隠岐不酔

食慾の秋豚なみに肥えた俺
落書をすなと落書誰がした

兵庫県　河原みのる

病鶏の死

うったえるすべも知らずにとりは死に
昔むかし米俵というものありき
それでもとクコへ一縷の望みよせ

兵庫県　遠山可住

たゞ穫れるように栗送れ柿送れ
学業を終えて女の線を出し
自家用車洗うも勤務時間内

鳥取県　清水一保

豊作の期待へ農家ちと疲れ

出雲市　中川晃男

賢妻に催促されて子を叱り
愚痴ばかりこぼして運に逃げられる
秋の雲これからうまいふかし芋

松江市　柳楽鶴丸

新築を砂上の城と云われまい
新しい時代に勝てず孫の守り

兵庫県　大江秋月

スナップへガイドも共に写される
言いたいことも言って万年駅手なり
登山家に悪人はなし山の宿

今治市　越智一水

倖せな会旧姓で呼び交し
化粧まで同じにさせている社風
夕焼へ恋どこまでも手を握り

竹原市　山内静水

急停車ごめんなさいとよろけられ
貧乏はしてるが真赤な血がたぎる

大阪市　森川すみれ

名月よ心の裏を見給うな
秋の酒友は勇退すると云う

新居浜市　小林孝正

望郷の一コマ何を焼く煙
淋しさにひたすらバイクとばすなり
夢よもう一度株屋に又かかり
猫の恋オールドミスの気に障り

熊本県　有働芳仙

しとやかに坐っても色気たゆとう
偉いからプライバシーも金になり

大阪市　賀本昇

焼香をせずには二号とて居れず

仙台市　軽部日東里

卓見と云うことにして封じ込め
献盃に来ぬのでこちらから出掛け
大言壮語して借りるもの借りに行き
正論が勝を納めて座が白け

## 同舟近詠

東京都　冨士野鞍馬

サーカスとバレーをまぜた体操美

大阪市　橋本緑雨

あけすけに言えるのも年寄同志なり

和歌山市　秋月宏方

五十すぎもう人生も九回裏
足音もやはり若い娘リズミカル

今治市　長野文庫

盆栽の価値を認めぬ律義者
憎む目の真上広々航空路
そのときは笑わず通訳へ笑い
満ち足りたその上の欲トルコ風呂

大洲市　米沢暁明

顔色が変わらぬ先に子はだまり
連載のまだ今月も逢わさない
原作とかえて儲かる映画にし
石段を今日は登らず拝んどき

今治市　月原宵明

家相気にしだして以来落ちはじめ
末っ子の寝顔へ短い縁を託び
もう許さないと年増の眼が迫り

弓削通過

義理のある駅を一礼して通り

鳥取

キャラバンが出そうに砂丘夕焼ける

名古屋市　長谷川鮮山

先生に告げると逃げた女の子
天声人語もうけ売りをやっている
改めて中味調べる支払日

# 川傍柳初篇研究（二一）

丸十府　高須啞三味
岡田甫　前田喜代人
○　岡崎重義
川端柳風　清博美
藤井和雄

243　**ここハ禅宗と四五人追人也**　桝水

**高須**＝鎌倉へ逃げた嫁を追って来た追人である。鎌倉には禅寺が何軒かあるが、建長寺と円覚寺が有名であり、この句は建長寺へ来た追人達が「ここは禅寺だから違う」と、あわてているところであろう。類句として、こんな句がある。

掃くほど来ると禅寺で噂なり　（傍二）

うろたえて駆け込む女中はき出され　（タル一二）

きれいな寺へ駆け込んで叱られる　（万安六）

建長寺は、掃除の行き届いたので、有名な寺である。

**前田**＝意は通るが、これでは面白くない。鎌倉までの途中、品川の海晏寺か下谷の正燈寺にとりたい。

**藤井**＝東慶寺は、禅宗円覚寺派の尼寺。東慶寺は禅寺と聞いて来た追手だから、ここは禅寺だから東慶寺だろうと、追手がロクに確かめもせず、色めきたった所だろう。高須説の「禅寺だから違う」は、おかしい。高須氏引用の三句は、いずれも同じ禅寺なるために再三間違えられ、迷惑千万だと、建長、円覚両寺の僧侶らのフンガイだろう。禅寺は一見して禅寺らしい静寂さで、それと素人目にも判るから、間違えられるのも、無理はない話なのである。

**丸**＝当時の東慶寺は、宗旨の如何より、尼寺として知られていたのだから、こうした表現となったのであろう。

**岡田**＝丸先生説に賛。礎解で面白いと思う。

244　**金時を産ミ　そふなのへ壱分やり**　一甫

**高須**＝悪相な遣手婆の句である。遣手の人相の悪いのと、祝儀の一分を詠んだ句は沢山ある。最近こんな句を見て、苦笑した。

つれあいの日さと遣手は梨を食い　（タル五）

**清**＝遣手の句も一通り出たから、特別な句を除いては、詳しい説明も要らなくなった。

**川端**＝賛。

山姥に何ぞ御用と遣手出る　（タル一六）

**丸**＝賛。

**岡田**＝同。

（15オ）

245　**両方へ抱てのませるはづかしさ**　五鳥

**前田**＝抱いているのは、乳児の双生子。句意は明らか。今と違って、双子を大変恥じたものである。後出に

外聞のわるさ乳付ケが二人来る（27オ）

なんて句もある。

**清**＝「畜生腹」などといわれて、むかしは多生児をひどく恥じたものだ。

**高須**＝俗に「畜生腹」と、さげすまれたのは、男女混合で二人以上生まれる「多卵性出生子」の場合で、一卵性の二タ子は、そうケイベツされもしなかった、のではないかと思うが……。

**丸**＝礎稿に賛。

**岡田**＝同。但し

乳が一つ赤子に足らぬ恥づかしさ　（タル一五）

の三つ子には、御褒美として扶養費が下付された。

御褒美は赤子に一つ乳が不足　（タル三三）

五人扶持大屋を聞いて持ってくる　（安七信5）

四斗五升お扶持を貰う恥づかしさ　（安六礼5）

などの句は、これを詠んだもの。これらの句によって、両親と赤子三人分、合計五人の扶持が貰え、その五人扶持とは、四斗五升だったことがわかる。日本にもこんな人口稀薄な時代があったんだから、堕胎医大繁昌の現代とくらべて、おかしくなる。

246　**あないちに野郎の交るミともなさ**　鼠弓

**前田**＝「あないち」は、地面へ小さな穴を作り、銭を投げ込み、勝ちとりする子供の遊びの一種。銭のほか土焼きのメンコ、ムクロジ等も使った。「野郎」は、いい若い者。あないちをしている子供の中に、いい若い者がまじっているのが「みっともない」という句である。

あないちの助言してゆく医者の供　（タル三）

あないちはいろはと云って叩くなり　（タル一五）

酢をくんな御用あないちしてゐるよ　（タル二〇）

**岡崎**＝贄。おとなげない。

**清**＝つい夢中になってしまう。

**高須**＝礎稿に尽く。「みともなさ」と言ってしまって、余韻はないが、街頭スナップとして、当時の風俗のわかる句である。

**丸**＝贄。

**岡田**＝同。

247　**品川ハたいこ五丁ハ百をつけ**　門柳

**前田**＝「品川」は東海道の第一駅で、飯盛のいた遊里。「たいこ」は太鼓持、男芸者。「五丁」は五丁町で吉原（江戸町、京町、揚屋町、角町、伏見町）の事とわかるが、さて「百」がわからぬ。

①百助＝安女郎を買う折助―武家に仕えた下賤の中間の総称。②百助化粧品店＝浅草雷門前にあった有名な店―梅花香で特に名高かった。③百文の卑妓―吉原河岸にいた。

等、吉原に関係あるものが多い。そこで私は、遊女達の化粧を言った句ではないかと思う。そうすると「たいこ」が変であるが、これを「だいこ」と取ると、句意は、品川は大根のように泥くさいが、吉原は百助をつけてフクイクとしている。

という事になるが、どうであろうか？

**清**＝贄。吉原の百助は間違いないが、品川の「たいこ」というのは、そう呼ばれる安化粧品があったのではないか？

**高須**＝礎解周到なれど、納得し得ず。ダロウ解の域を出ず。そのものズバリの解なきや？

**丸**＝「たいこ」は太鼓か大根か？　「つけ」は付けか漬けか？　残念ながら、小生もまだ解を持たない。柳雨翁の「川柳吉原志」にも、疑問句として挙げてある。

**岡田**＝難句だが、かねてボンヤリ考えていたダロウ解を披露すれば、女郎から客へ届ける文使いを詠んだ句ではないか、と思うのである。吉原では、大きな妓楼なら、見世の若い者、あるいは廓内に女使いを専らとする男がいて、大体一通百文ぐらいで引受けていた（ひどい奴は二百文もせびった）らしい。遊女三千人といわれた吉原なら、文の数も相当で、江戸中をテクテク歩いても、十分商売になったであろう。ところが、女郎の数もその十分の一ぐらいの宿場の品川では、太鼓持に頼んで届けてもらうのがせいぜいだった――。この解が正しいとすれば、末尾の「つけ」は、文に百文を「添える」意となるわけだが……。

**丸**＝なるほど、恐らく正解であろう。

248　**金ッ喰ひ柚ざね顔の娘なり**　五丸

**前田**＝「金ッ喰ひ」は持参金とおなじ。「柚ざね顔」とは、瓜実顔のもじりで、顔のきめが柚子のように荒く醜いところから醜婦をいう。「持参金つき」の娘は醜いということを、柚にたとえただけの句。

金ッ食ひ四八ばかりの娘なり　（笹一）

**高須**＝ユズというもの、ミカンなどと違い、そのものそのまま賞味できぬもの故、そんな言い方をしたのであろうが「柚ざね顔」とは、何とまずい造語か、もっと何とかタトエようもあったろうに――。

**丸**＝贄。

**岡田**＝満面アバタで、ユズの上皮みたいにデコボコなのである。

持参金両に一つのあばたなり　（安五松4）

で、百両の持参金なら、顔中にアバタがある……というより、アバタに目鼻をつけたような顔というわけ。

249　**蓮の葉ともろとも男かぶりふり**　魚交

**前田**＝「蓮の葉」は蓮の茶屋（出合い茶屋）のこと。池の茶屋ともいう。池の茶屋で、多情な後家にくどかれたが、男は承知しなかった。僧正遍昭の歌に

はちす葉の濁りにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

があり、「蓮の葉ともろとも」は、これを暗示したのであろうか。

**岡崎**＝不忍池畔のつれこみ専門の出合い茶屋に上がり込んでいるくらいの男女だから「くどかれて承知しない男」では、すっきりしない。

今ので三度ぎしつくと出合い茶屋　（天二信2）

というわけで、

出合い茶屋男は半死半生なり　（安四信7）

の始末であろう。由来、女の性感の特徴は、オルガスムの反覆にあるが、男は生理的にそうは行かない。そこで、なおも繰り返しを要求する女に、

出合茶屋ゆるせの声は男なり　（安二鶴1）

で、風にそよぐ不忍池の蓮の葉と同じように、かぶりをふっているのは、もういけませんと拒絶の所作である。

**清**＝岡崎説に贄。

もう女見るのもいやと出合言い　（天元仁3）

**高須**＝「蓮の葉」とは、蓮の茶屋ではなく、上野不忍池畔にあった出合い茶屋（現今の逆さクラゲ宿）の二階から見える不忍池の「蓮の葉」そのものを言ったもの（岡崎説）で「かぶりふり」は「拒絶の所作」でなく「降参の意志表示」で、もうもうへトへトというところである。

**丸**＝諸説につく。

**岡田**＝あますところなし。

250　**ゆうてうな夜這ひ枕を持て行**　葉十

**前田**＝句意あきらか。「ゆうてうな」と「枕」の組合わせ、平凡であるが面白い。

太え奴夜這ひ枕を持ってゆき　（天二梅2）

悠長な夜這ひ米沢町持参　（笹二）

**岡崎**＝夜這い相手は、ほとんどが下女。

**高須**＝「枕を持って行」く位だから、先方はもちろん承知で、心待ちであろう。だから「悠長」らしく、別に急ぎもせず、忍

び足でもない。ー近頃の住宅難では、寝る時は別々だから、夜中ともなれば
女房の床へ枕をもって這い
なんて亭主もある。

**丸**＝費。「ゆうてうな」にユーモァがあふれている。

**岡田**＝費。死んだ喜劇役者の曽我廼家五九郎は、旅興行に出ると、一座の女優の部屋へ、枕を持って行ったという。

**高須**＝ボクは、五九郎の全盛時代、二年間ばかり、その私設秘書をやったことがある。丁度川村花菱さんが座付き作者だった頃と思うが、ボクは興行面にはタッチしなかったので、顔は合わなかった。

三月二十五日開

251 **駕籠代ハ三文酒手壱分やり**　梅枝

**前田**＝吉原へのカゴ代は三文だが、サービスの酒代は一分というだけ。

初雪をふみちらかして一分とり　（逸）

があり、また

四ッ手駕むだ直をきめて乗て行
（タル一六）

のように、主題句に似た句は沢山ある。

**岡崎**＝遊蕩児の見栄と、実費との対比のおかしみを詠っただけ。

**清**＝普通の相場ぐらいで乗ったのでは

四ッ手駕さびしくかける定値段
（タル一一）

いくらで直をしたか四ッ手牛のやう
（タル一九）

と、一所懸命に走ってくれない。そこで一分もの酒手を出すことになるのだが、そこは現金なもので

とぶぞと見へしがたちまち土手へ行
（タル二一）

となるのだから、はずまざるを得ない。

**高須**＝遊蕩児の見栄（岡崎説）もあろうが、自家を出た以上、一刻も早く遊里へ入りたいボッボッたる遊心（清説）もあり、実費よりずっと高額なチップを出す、という遊客心理を詠ったところが、ミソだが面白い句である。

**丸**＝費。浪費家の面目躍如。

**岡田**＝「三文」は、安いカゴ代の意味ばかりでなく、洒落気の多い遊客の中には、カゴ屋に「おい、ナカまで三文でやれ」などというのが、事実いたのである。

三文につけたが四っ手機嫌なり
（傍三）

そういう客に限って、酒手を一分ぐらいはポンとくれるから、カゴカキも御機嫌で乗せて走り出す。

252 **初りくとみよしへ松を出し**　鼠弓

**前田**＝「みよし」は船首（へさき）のこと。「松」は首尾の松――浅草御蔵の川端にあり、吉原通いの途中にあったので、その名があると伝えられた名木。それで、その松を、面白く詠んだ句であろう。

**清**＝ダロウ解だが、私は「忠臣蔵」二段目の幕あきを詠んだ句ではないかと思う。

**藤井**＝例によって、類は友を呼んでの大一座、吉原へ繰り込む船中の景。舞台は首尾の松へさしかゝった所で、船のみよしへ松が出たのを見て「さァ初まり初まり、これから本舞台」と音頭をとったのは、たいこもちか？

**高須**＝礎解および藤井説に賛。吉原へ急ぐ猪牙舟の船首（みよし、舳とも書く）が首尾の松にかかった。もう吉原に入ったも同様な心理になった、ということを、太鼓持などのハヤシ言葉にならって詠んだ句。

**丸**＝諸説拝聴。持説なし。「初まり初まり」は、見世物などの呼び声だから、大胆な憶説を述べれば、お千代舟の妓夫の一所作を詠んだものか、と思うが……。

**岡田**＝礎稿通り、吉原を芝居にたとえれば、序幕には必ず首尾の松が、猪牙舟のヘサキに現われる。といった場面。すなわちそれが吉原行きの最初の景だ。というだけの句である。

（15ウ）

253 **間のぬけたかさご弐人リで売て来る**　眠狐

**前田**＝「かさご」は魚の名。頭が丸く、大きい魚で、腹が平たく、黒いのも赤いのもある。これの干したのを、五月の節句に食べる。アンボンタンともいう。アンボンタンは抜け作の異称にも使うので「間のぬけた」といったもの。二人で売って来る、この「かさご売り」など、間の抜けた感じを受けたであろう。

弁慶の使ひかさごで飲んでゐる
（拾二）

やせ我慢かさごの中へ武者一騎
（タル五六）

間男と亭主あんぽんたんで飲み
（タル五三）

馬鹿も海あんぽんたんも海で出来
（タル四〇）

**藤井**＝イワシやアジ売りと違って、あまりイキのいいあんちゃんは売りに来なかったらしい。

**高須**＝「売て来る」は「売りに来る」ことで、こういうものを売りに来る行商人の「二人連れ」というのは、妙に「間の抜けた」感じのするものである。

**丸**＝「かさご」は、五月節句に用いたもの。従って「間のぬけた」は、この時季をはずれたと見て、節句過ぎにばかばかしくも、二人連れでかさごを売りに来ている、街頭の一スナップ句だが、もちろん礎稿の意も含めてある。

**岡田**＝丸先生の「時季はずれ」という解面白し。なるほど「間の抜けた」感じであったであろう。

254 **花よりハ団子に女房ゆだんせず**　長笑

**前田**＝夜桜見物よりも、紋日の名月（団子）を用心している女房。こんな女房にかかっては、亭主骨が折れる。

きつい事十五夜及び十三夜　（タル一九）

花よりはだんごのどらが大きすぎ　（タル一五）

花よりもだんごのいやな所なり　（籠三）

**岡崎**＝賛。俚諺「花より団子」をふまえている。

**清**＝亭主が夜桜見物にかこつけて登楼することを警戒している女房、とだけ解していいのではないか？

**藤井**＝何かというと遊びたがる亭主に、女房は油断できぬ。特に月見は二度あるから、なおさらと解したい。

**高須**＝岡崎説通り「花より団子」とすれば、清説の方だが、「花」を桜の花見に、「団子」を月見の団子ととると、礎稿となるが、例句を見ても、どうも「花と月」らしいので、礎解に賛とする。このすぐ後に

夜桜を見捨てゝ土手で団子なり　（16ウ）

というのが出て来る。これも「色気よりも食い気」ではなく「見るより、するがよし」と見るべきであろう。

**丸**＝礎稿プラス岡崎説賛。

**岡田**＝同。

255 **そら色を召すと触出す華の宵**　三朝

**前田**＝「そら色」は、①染物屋の手、②商家手代の着物（薄藍色）③不祝儀に着る水色の紋服。この場合、商家手代の吉原の夜桜見物にもとれるが、「召す」（他動四）という動作を敬っている語があるから③にとりたい。紋服を着ておられると、夜桜見物の誘いのふれが出た。残念至極というところだろう。

そらいろで猪牙へのるのは出来心　（タル一七）

**清**＝「葬式のあと吉原へ行こうじゃないか」という誘いがあった状態を詠んだ句、ではなかろうか？

**藤井**＝葬式の紋服を着て勢揃いしていると、もう式後の二次会のふれが来た、という句だろうが、「召す」というからには、相当の家柄と見たい。

**高須**＝この句の敬語は、遊び友達の間でシャレて使った敬語とみて、特に家柄など問題にしなくてよいのではないか。たゞ

とむらいは山谷ときいて親父行き

同様の、葬式帰りの吉原行きを、こんな風に詠んだのではなかろうか？

**丸**＝皆さん「花の宵」を問題にしていないが、この言葉は「明日の花見をひかえた夜」のことであるから、奥女中などが、明日の花見衣装について「お局さまは〝空色をお召しになる〟」と、はした女達が言いふらしている、と一応解いてみたが、特に空色と言ったのが、わからぬ。明日の日和にかけた意ともとれるが、野暮ったい空色を召すとは、どうも覚束ない、ダロウ解の域を出ない。

**岡田**＝丸先生解のように、どうもわからぬ句だが、恐らく「明日の天気」を祈る意を含めたもの、と解するのが、一番妥当のようだ。もちろん奥女中の花見。

256 **垣根が隣のでかぼちやを弐ッやり**　秋紅

**前田**＝自分のところの南瓜が、隣の垣根になった。そこで、二つやった、というだけの句。よく見られる風景だが、平凡。この句と反対の、意地悪の句をあげる。

下卑な意趣かぼちやのつるを根から切　（傍二）

**藤井**＝この南瓜、因果にも隣の人の目につく所にあった。隣では、もう貰ったつもりで、毎日ながめていのるだから、やらざるを得ない。ありそうな情景。

**高須**＝表現の下手な、つまらぬ句。お隣の朝顔をほめて、毎日水をやっている、という句があるが、その方がずっとよい。

**丸**＝その通り。

**岡田**＝同。

257 **二階ばり迄あぶながる病ひ也**　亀遊

**前田**＝「ばり」は梁のことか。二階の梁まであぶながる病気で、この句では神経衰弱症（ノイローゼ）であろう。

**岡崎**＝賛。いつも寝て、天井ばかり見ているものだから、いまにハリが落ちて来やしないかと、被害妄想になっているのだ。

**藤井**＝長病も小康を得て、床から出られるようになったので、たまには二階の縁に出て、外でも眺めるように、医者から許されたのだが、まだふらふらして自信がない患者の容態ではなかろうか？

**高須**＝「梁をあぶながる」では「杞人の憂い」で、少しノイローゼすぎよう。この場合、やはり藤井国手の診断に従う方がよいようだ。

**丸**＝諸説拝聴。持説なし。

**岡田**＝「二階ばり」は、二階の手スリの意と解していたので、藤井説に賛。

○

## 川傍柳研究（一九）訂正

12頁上段最初へ「三月十五日開」と一行入れる

13頁上段30行目「この歩みも」ハ「その歩みも」

〃 二段20行目「帰途中」ハ「帰る途中」

〃 三段22行目「清＝」ハ「藤井＝」

14頁三段31行目「秋江」。「秋紅」

15頁三段2行目「三味線が二と」ハ「三味線が二挺と」

# 北京の燒餅（シャオピン）君

東野大八

北京の銀座、王府井に玉成号という食料品店があった。広い店先には、シナ菓子にパン、腸詰に洋酒、ビール、そしてタバコまで並んでいた。

観音開きの大きなガラス戸を開くと、とっつきに鉄製の丈夫な網に囲まれたカウンターがあり、勘定のたびにピンポン玉ほどの大きなソロバンをパチパチとやって、毛筆で走り書きした黄竜旗まがいのでっかい領収証を低頭の限りを尽して差し出した。

この店の奥に手ごろの喫茶ホールがあり、コーヒやミルク類のほか、店で売っているものは何んでも皿に乗せてテーブルの上に並べてくれた。

僕はこのホールの常連であった。毎朝かならずここでミルクとパンの朝食をとるのだ。ミルクが十銭、天プラのアンパンが五銭だった。僕はそれらを前にして、窓越しに胡同の窓をおおってさわやかに葉を茂らせた楡の大樹を見るのが癖だった。この枝には山鳩やかっこうの姿がいつもちらちらしていた。

ホールには二人のボーイが白の大掛児もりりしく、いつも立っていた。一人はワンさんといい、さいづち頭であばた面の至極愛嬌のいい少年。いま一人は張さんで、これはのっぺりした貴公子面の美少年、僕はきれいな張君より、あばた面のワンさんをヒィキにした。

一時最初、このホールに入り込んだ僕は、正面の壁のでっかい額の文字に見入った。呉佩孚将軍の書で、北京の商家にはどこでも彼の一筆がかかっていた。いうなれば岐阜の料理家に多い伴睦書みたいなもの—。

「旦那、これがよめますかい」

とあばた面が横からいったので、造作はないこんなふうだ、と適当に説明すると、彼、フムとばかり派手に感じ入った。彼はあとで知れたことだが、一丁字も読めない気の毒な少年だったのである。往時から「あばたに字なし」とよく中国でいわれたことだが話の通りの彼であった。

店で食事をすると、僕は必ず十銭のチップをその二人のうちのどちらかの手の平に乗せてやった。そんなことで僕が訪ずねると大層二人は気を使うが、ワンさんの方はすっかりこちらを大人（タイジン）扱い、こちらが困るほどの気の使いかたをする。

「オレの顔が一毛銭（十銭）にみえるか」とあるとき皮肉をいったら

「とんでもない、貴方は関羽のように偉厳があるから好きだ」

といったので、僕は思わず吹き出した。ヒゲのない僕の顔が関羽にみえたからではない。単純素ぼくな彼にとっては、最も尊敬すべき偉人はこの世の中で関羽以外には考えられないのだ。

ワン君がいないとき、貴公子面の方が、ワンの奴はタイジンから

## 続 川柳書架 (59)

### ひとすぢの春

三条東洋鬼著

★本書は三条東洋樹氏が、号を東洋鬼と称された頃の句集で、巻頭に椙元紋太、釜永睡花両氏の序文が掲載されてある。

★昭和十五年九月十八日発行。菊半截判、九八頁。定価八拾銭。発行人、神戸市神戸区栄町五丁目二八、三条政治。

★著者が真摯な態度で川柳と取組んでいることが、本書のあとがきを読めば判る。少し長いが抜いておく。

「商人の子として生れながら、私は人ほど金も儲け得なかったし、地位も築けなかった。然し私は私の過去の生活を省みて川柳と共に在り得た喜びを思ふ時、富や地位を得られなかった事をも後悔しない。むしろ私は将来も平凡な一市井人として、巷に起こる生活、人情の中に起居して、所謂詩人の詩でないものを綴りたいと思っている。この句集を出版するにあたり、過去二十年間、一日一度は川柳を考えて来た自分の、質的な収穫がこれだったのか、と思ふ時、慚愧に堪えぬものがあるが、この辺でいったん過去の句を整理して、明日への出発に想いを新にしたい」

### 父百句

小田夢路作

小田夢路編著

★本句集は亡き父を偲んで、五七日の間に作句したものを手向けぐさとして上梓したのである。題字は坂井久良伎翁。

★巻頭に夢路えがく亡父小田梅吉翁の肖像画写真が載せられてある。

★昭和十八年四月一日発行。菊半截判、一九頁。非売品。編者発行者小田夢路、大阪市福島区玉川町四丁目九七

★著者はたまたま広島の実家に帰省げんばくに出くわして没した。


營業所
阿倍野店
堺店
住吉店
平野店
都島店
蒲生店
十三店
九条店
credit system
丸越
買いよい 良い安い
月賦百貨店

頂く一毛銭で、いつも焼餅（シャオピン）を一つ買って食うのだと教えた。焼餅というのは、白ゴマが片面いっぱいについた、一等麺の油焼きで、貧乏人とはおよそ縁ない高級食なのである。

「そういえば、彼の顔は焼餅に似ている」といったら、彼は腹をかかえてわらった。相棒のあばた面が白ゴマに見えたのだろう。

ある日、僕はビールを注文した。ワン君が早速にアサヒビールを運んできた。五星というシナビールがあるが、これはまずくて飲めたもんじゃない、頭の鈍い奴をここでは五星（ウーシン）という。それぐらいアルコール分が不足していて、お茶の出がらしを飲んだ方がまだましなのだ。その点、太陽（タイヤン）ビールはすばらしい、日本製ですからね、とお世辞をまぜてそういった。

そのついでに彼はこんな話をした、うちの主人は、太陽を日本から仕入れた原価で売って儲けている、と妙なことをいう。原価でさばいて何が発財（儲け）だ、というと、木箱代がモノをいう、と説明した。日本のように木材の豊富な国なら問題じゃあないが、中国は木材の類が少い。蒙古などは燃料が乾燥牛糞で、絶対といっていいほど薪炭類は使わない。

なるほどと、僕は南方華僑の本家筋のがめつい生活の下地がこの辺にあったものかと感心した。

日本製品は海を越えてくるものが多いので、包装類は至極凝ったものばかりだ。それを彼等は見脱さない。縄、わら屑、荷札の針金まで丹念に保存し、木箱ときたら下へも置かない。

北京の場末、天橋（テンチャオ）の小盗児市場（泥棒市）では、サイダーびんのフタから、フタのない味の素の古缶まで売出している。僕の友人の中国人など、抜いた汚ない虫歯まで大切に紙にくるんでこの市へ運ぶ。天橋の三文歯科医が喜んでとってくれるからだ。その医者は、その汚ない代物を店頭のケースに入れて看板にする。うちはこのように患者が多く、こんな具合に実績をあげている、という見本になるのだ。

戦後、日本にもホルモン焼というのが今もって大流行だが、中国では四千年以上これの実績を持っている、豚一頭殺しても何も残らない。毛（向うの豚は黒くって毛がある）はブラシ工場へ、爪はサイコロの材料に回し、頭から尻尾まで眼玉まで食ってしまう。ホルモン焼は貧乏人のA食に回る。戦後の日本人は、こうしたシナさんの生活の知恵を失敬して商売にしている。むかしなら畑のこやしにもしなかったしろものだ。実際のところ、こんなものにはホルモン的価値がどれだけあるのか、僕は今もって懐疑的だ。

現に玉成号のワン君が、好きな焼餅を僕の奢りである夜、盛大に頬ばりながらも、内臓のゴッタ煮には眼もくれなかった。なぜやらんのだ、というと回教ホイホイのガラスランプを横目に

「そんなものは花子（乞食）の食べるもんです」

とはなもひっかけなかった。

時折、今の僕はその乞食も食べないようなものに金を払って、義理づくで口にするときがある。するときまって北京の焼餅君を思い出す。彼はいま生きているなら一体どうしていることであろう。案外、玉成号のような立派な店で、ジャングイに収まり悠揚として胡桃を鳴らしているかもしれない。時には関羽と呼んで、行きづりの日本人の黄色い顔をチラとそのさいづち頭の底によぎらせながら……。

## 路郎先生の喜壽・金婚の祝賀について

——お知らせとお願い——

日本柳壇の巨匠であり、我等の恩師である麻生路郎先生の喜寿・金婚祝賀行事については本会が主体となって昨秋以来慎重な企をととのえ、全川柳人ご賛同の下に一大盛典を挙行する運びになっておりましたところ本春に至り路郎師から

諸君のご厚意は衷心から感謝するが、目下自分の健康状態では到底そのご厚意にお応えすることがむずかしいと思うからお断りしたい。

と固辞されましたので、本会ではその前後策につき数回役員会を開催いたしまして、先生のお身体に障りのない範囲で、同時に先生のお気持ちに添うた我々の祝意をうけて頂く行事として左記企画のご揮毫についてご諒承を頂きました次第でございます。

ご承知の通り先生はご高齢のことでもあり、願わないことではありますが、これが最後のご揮毫となるやを思う時、我等川柳人として愛蔵すべき家宝を得る、得難きチャンスではないかと存じますので、何卒この機を逃さずご参加お申し込みの程お願い申しあげます。

昭和三十九年六月吉日

**川柳不朽洞会**　**常任理事**

北川　春巣
松江　梅里
川村　好郎
西尾　栞

代表　若本多久志

### 麻生路郎先生の作品頒布

**作品**——（一）軸・横額（二）色紙（三）短冊

**揮毫料**——不要とし、お申し込み参加者より、喜寿・金婚お祝金を右相当額拠出して頂きます。この額につきましては常任委員会に於いて各標準を定めてありますので、お申し込み受付と同時に詳細な規定をお知らせいたします。

**頒布期間**——先生のご健康状態も考えまして、お申し込み順に六カ月以内とし、昭和四十年三月迄とします。

申込所　大阪市住吉区万代西五丁目二五　**川柳不朽洞会**　電話大阪六七一局六〇八一

# 近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

ライバルは爪をかくした猫のよう　宮崎市　野口卯之助
戸締りを固くしとけと旅へ父　同
公休日電話のベルへくつろげず　同
点滅のネオンいつかの恋思う　同
転勤でいたみましてと言う箪笥　同
フラッシュの十字砲火へ時の人　同
植林をするかのように背ナの灸　同
洋行を二言目には鼻にかけ　大阪市　吉川肇雪
子泣かせのスパルタ教育ママ自慢　同
離婚してネクタイの色派手になり　同
病める子の土にまみれる日を願い　同
駅までと白いエプロンついて来る　同
エンゲージリング暮しのしんをまだ知らず　同
マスコミに乗る子で鼻の高い親　同
自殺幇助社会保障の手は借りず　倉敷市　水谷谷水
としよりの日のバスとしよりの皆んな掛け　同
イボを取る特技もあって庶務の隅　同
名誉とはしり拭いまでさせられ　同
恩給で囲い無粋な人でいる　同
後妻来て一躍子沢山になり　同
決然と禁酒の夜の箸をとり　京都市　大久保和三郎
かぎっ子の瞳に母と行く子の多き　同
座布団のいらぬくらしへ子が出世　同
ゲテ物の趣味を屑屋に覚えられ　同
ライターの風に掌を貸す恋ごころ　同
末っ子に店を委せる我をたたむ　同
儲けてか儲けるためか店改装　堺市　青山慶之助
内職の母有難し味けなし　同
類焼をまぬかれタタミが駄目となり　同
ほれて来た証拠わがまま言う彼女　同
金に縁ないのがチップ気前よし　同
倦怠期胸の鼓動もずれている　枚方市　宮川珠笑
阪神が勝った新聞出迎える　同
若社長乗せる外車の守り札　同
人生きる限り終らぬ主婦の用　同
半日で噂が村を縦断し　同
氷引いて医者に内緒の神仏　大阪市　山田季鳥
食慾の秋は茶漬で又すすむ　同
黒眼鏡かけてタクシー断られ　同
貧弱な体はっきり影法師　同
税務署は儲けた事を聞かぬ処　同
お隣りのバイクをなでる子にあわて　宿毛市　渡辺伊津志

## 柳志寸言

本多柳志

◇こんこんとして絶えず湧き出しているのが泉であり、もくもくとして絶えず噴き出しているのが火山である。私の尊敬するのは泉の様な作家であり、火山の様な情熱家である。

×

◇人間の平均寿命が又々延びたという事だ。苦しむ時間が延びたと思うと悲しくなるが、川柳時間が延びたのだと思うと楽しくなる。

×

◇蟬は土中に七年から十年位も居て、地上に日の目を見たら七日位で死ぬそうな。何だか我々の川柳の運命にも似てあわれである。

×

◇取り返すことの出来る、金や物をとられて怒らぬ人はいないが、絶対に取り返しの効かない時間を盗まれて怒る人は少ない。

×

◇文蝶さんが亡くなった。豆秋さんや文蝶さんの様な人には、もっと永く生きていてほしかった。併しこの人達は此の世に生きていた事の証拠になる様な、いい作品をたくさん残していかれた。うらやましい。

母ちゃんの意地が意外なことで（もめ） 同
叱る声の太さが女房の気に入らず 同
聞いていた筈の子供がもう眠り 同
オリンピックにふり廻されて酒を飲み 同
豊作の秋を農夫の無表情（鳥取市） 近藤 秋星
あれ以来見せない顔が気にかかり 同
百姓にオリンピックを見よと雨 同
敬老会少々ホラも吹いて来る 同
新婚を見送って来た足のマメ 同
すき焼の箸が兄弟喧嘩させ（玉島市） 井上 旭峯
お見舞も廊下小声の日が続き 同
間違いを詫びて戻れば丸い月 同
移り気が養老院でまだやまず 同
お稽古へ佳き日が迫る日本髪 同
紙の将棋盤で吾子から挑戦され（仙台市） 平野 光道
使い込みしていて赤い羽根に見栄 同
百姓の娘も観光にハイヒール 同
もう一つのハンコはへそくり預金用 同
共稼ぎの妻乳房から萎びゆき 同
おそるべき食慾母を越して伸び（香川県） 三井 酔夢
球根を植えて来る春疑がわず 同
心得た嫁仏壇の光りよう 同
詩を綴る妻の夕餉は又も鍋 同
運転が出来てライバル送るはめ 同
踏み切るはいと易からん寡婦通す（倉敷市） 水谷 千翁

日の当る日をどん底であきらめず 同
かいつまみ廊下の長さだけ話し 同
ほろ酔を任すに妻の肩でよし 同
暑さにはバテズ女にしてやられ（パロアルト） 斎藤 流路
平穏な生活白髪を染めてをり 同
サツをくる手つき上手に借りてゆき 同
内職にむきませんよの指を見せ 同
奥の手の養老院で対抗し（羽曳野市） 杉本 胡人
子がなくて互の趣味を尊重し 同
足並の揃わぬ子等で国平和 同
手紙が来るから出さない恋の意地 同
たいくつは包紙まで読み返し（新居浜市） 安藤 桂仙
放火魔のように近所へたきつける 同
裏切らぬ犬を愛して嫁く気なく 同
影日向なしに働きうとまれる 同
娘には世間の男を虫という（鳥取県） 鈴木村諷子
長寿法のんびり暮そと思へども 同
テレビから庭の隅から虫の声 同
窓開けて祖母にも聖火拝ませる 同
せっかちな僕と悟った金欠日（兵庫県） 常岡 孝風
残業に家計黒字になるでなし 同
理解者出ずデマを信じる人ばかり 同
骨のある人間ですと負けず書く 同
黒田節上手にうたいこなす下戸（児島市） 伊丹柳瓢子
フィルムが少し足りないピクニック 同

## 現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

285 本田柳志

（一）本多省三（ほんだしょうぞう）（二）柳志（りゅうし）（三）——（四）大阪市城東区今福南四（五）明治三十六年三月四日（六）大阪市阿倍野区阪南町西一の二（七）学校図書卸（八）(661)二九四六（九）**学力の程度左派にも成り切れず**（一〇）旅行・登山（一一）有（一二）昭和二十五年十月


コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL (271) 6684
御集会には階上を御利用下さい

スモッグに満月よごれた顔で照り　同
たまにした化粧夫の気をもませ　同　末沢　花美
雑踏の中で孤独のサングラス　西宮市
恋の足跡消やす枯葉の降りしきる　同
空っぽのハートを抱いたままに秋　同
指輪はずして福祉の前に立ち　同
水溜りよけてものびる母の傘　羽曳野市　白井　孝子
背なの子もさしている気で傘をもち　同
懐ろでぬくめて母の便り読む　同
消燈に逃げたほたるが見つけられ　同
結論の出ぬ沈黙へ虫が鳴く　大阪市　和田　痴亭
握ればこぼる砂さらさらと近づく　同
ホステスの朝から長い赤電話　同
社長今日個人としてのベレー帽　大阪市　島田　雄峰
欲の皮つっぱっている背中の荷　同
婚約をしてからあせったなと思い　同
退院で元のワンマンぶり返す　大阪市　福富　隆子
停年感スモッグの様嫌な日々　同
豚売ってオリンピックへはせさんじ　同　永宗　宗義
夕涼みたるんだ顔が話し込み　岡山県
どんぞこのくらし夏やせなど知らず　同
ボス入院婦長おかしい程あわて　同
前掛でふいてリンゴを売る市場　金沢市　根上　杏花
嫁入りの仕度え免許証も取り　同
オリンピックにそなえテレビも三代目　同

三ちゃんの丹精稲穂重く垂れ　山梨県　赤地　五朗
ふたありの気安さ広島弁となり　同
選挙戦いづこも同じような風　同
順番は最後と決めた母の風呂　羽曳野市　谷　一征
ソロバンは営業計算機は経理　同
荒れすさむ心酒すら寄せつけず　同
ビール飲みながらお嫁に行く話　大阪府　井上美恵子
二DKそろそろせまく倦怠期　同
私って馬鹿ねと女甘えたし　同
肩書のない名刺にも意地がある　大阪市　西本　保夫
勤続では誰にも負けぬ平社員　同
元軍人の意気あり今だに平社員　同
農村のテレビ素朴を忘れさせ　広島県　河本　雪男
垂れた穂を飽かず眺める老人が　同
農薬に虫の音絶えて秋の夜　同
漢学者子にふりがなの要る名つけ　大阪市　藤富　淀月
駅弁を取次ぎ車窓和みだし　同
十円の余韻を鐘の下できき　同
金メダルもらって親が見直され　七尾市　松高　秀峰
委員長損を承知で引受ける　同
敗れてもユーモアたっぷり名選手　同
父親が亡おてもボート部員なり　大阪府　石坂　新雪
調理師の気嫌お頭の方をくれ　同
婚約に踏むミシンにも熱が入り　羽曳野市　井谷みつお
土の香と朝露恋しいなか道　同

## (286) 西貝　篤

(一) 西貝徳之助(二)篤(三)
——(四) 長野県須坂市新町(五)
明治四十一年四月十六日(六)長野県須坂市新町(七)家具製造業
(八)——(九) **貞操の鳴咽へ銀貨覗かせる**(一〇)絵画・彫刻
(一一)有(一二)昭和八年二月

## (287) 喜田子楽

(一) 喜田宗二郎(二)子楽(三)
——(四) 津市丸之内緑町二〇六
二(五)明治三十六年五月三十日
(六)伊勢市(七)歯科材料商
(八)津局⑧三四〇三(九) **小学の旅行へ同じ笛が売れ**(一〇)古事研究(一一)有(一二)昭和十年頃

## (288) 高崎雄声

(一) 高崎増雄(二)雄声(三)
——(四) 堺市賑町三丁五〇(五)
明治三十六年十月三十日(六)石川県鹿島郡金丸村(七)駅売店
(八)——(九) **父母が頻りに恋し茄子の色**(一〇)——(一一)有(一二)昭和二十七年七月頃

サロンパス仕事の肩へ派手に張り　岡山県　阿部　良江
腹立ちをまぎらす掃除ゆきわたり　同　・
禁煙を守衛に誓い倉庫番　神戸市　吉田　隆史
部隊長今は公職逆の地位　同
朗々とやれる隣りは余技を持ち　羽咋市　三宅　ろ亭
せめてもの感謝俵に酒をすえ　同
叔父さんが来て掛時計の年令を知り　青森県　岩淵　一星
生活の苦のない地位で胃をやられ　同
秋晴れを碁石片手に一人留守　松原市　守屋　万竿
過密都市何とか食えてまだ膨れ　同
眼底出血そろそろ番が回って来　兵庫県　斎藤たけお
どこからの電話か社長ニコニコし　同
閑日のない病人にあくび見る　青森県　川村　映輝
天才と言うが努力は見て呉れず　同
豊作の川をへだてた水害地　島根県　星野　侑正
無免許は脱兎のように村をぬけ　同
生別れますます笑わぬ女になり　竹原市　杉原　愛鳩
バラが好きしかし菊にも気がう　同
箸枕もう勘定が気にかかり　奈良市　村上　春己
予定にはなかった聖火見て飯り　同
教養と別に素直さ欲しい嫁　高知県　山川　勝子
コスモスの抵抗倒れたまんま咲き　同
一に金二に金けちな金払　八代市　永松　道雄
半裸体どこを見るのかミス審査　同

奥様は十時間睡る美容法　高知市　須藤　俊江
丹前で恩師とするそばの味　同
会長と言う重責に軽い腰　玉野市　小谷　仙山
蕎麦の花村捨ててから懐しい　同
嫉妬心消えやらず女化粧する　奈良市　岡本日出夫
仕事追うスリルに生きる今日の城　神戸市　西本貴美女
悪友が来ると女房がトガリ出し　愛媛県　澄本　満子
パンのため白衣曝すにキタミナミ　茨木市　高木繁太郎
老会で浮世の末を返り咲き　大阪市　松村　喜久
新聞のかげからのぞかす人が乗り　河内長野市　森本黒天子
曼珠沙華火遊びの児等の手に　笠岡市　谷本鈍愚坊
取り入れがすで案山子ものびて居り　京都府　西村句楽坊
走者ゆく世界平和のシンボルと　善通寺市　伊藤　歌子
三者から見れば勝てる平凡将棋　松江市　岡崎　祥月
杉下駄に詩情を湧かす石畳　大阪市　坂井きち子
なつかしく思う古里地名だけ　大阪市　多田　富士
世界一のプール作って銅一つ　大阪市　谷沢　源川
孫欲しさ谷間の地蔵に願をかけ　大阪市　木村　久子
オリンピック国旗上がらず物価上げ　大阪市　田中　風柳
不惑をば酒がまよわす山の宿　大阪市　川口　弘村
献血を売って日赤ボロ儲け　大阪市　木村　濁水
金メダルかけたしゅんかん涙みる　大阪市　大池　芳
マラソンの全コース見て応接し　大阪市　花田　繁子

(289) 長宗白鬼

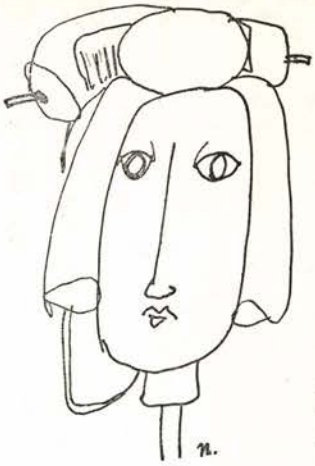
(一) 長宗清弐(いち) (二) 白鬼(はくき) (三) ―(四) 東京都世田谷区世田谷二丁目二〇二三 (五) 明治三十八年十月十三日 (六) 長崎県長崎市 (七) 土建会社長 (八) (429) 七二六一・(321) 九三〇一 (九) もう一人の俺が妓の手を握る (一〇) 小唄 (一一) 有 (一二) 昭和四年八月

(290) 田中狂二

(一) 田中吉三(たなかきちさぶろう) (二) 狂二(きょうじ) (三) ―(四) 堺市今池町二丁五番地 (五) 明治三十八年十二月十七日 (六) 大阪市 (七) 鉄工業 (八) 堺 (九) これ着てゐきと仲良し服を脱ぎ (一〇) ― (一一) 有 (一二) 昭和三十年頃

# 特集 妻を語る（下）

―到着順―



①失礼ですが
あなたの奥さんは
どんな方？
―叱られない範囲で
お洩らしください
②あなたの奥さんを
モデルにして詠まれた
と思われる句をお示し
下さい
―アンケート

## 隻手の爪切り役

高須啞三味

読みあきた書斎へ妻のお茶と来る

これは「昭和川柳百人一句」に出ているボクの句であるから、恐らく川柳として発表されたボクの「妻の句」の、最初のものではないかと思う。

「カニは自分の身体だけの穴をほる」というが、川柳作家も、所詮は「自分の生活以上の句は作れない」もので、ボクなども顧みて忸怩たるものがある。

要するに、この句の出来る頃のボクには、一応「書斎」といえるものがあり、まだサラリーマンでもなく、とにかく本箱のある部屋で、自分だけの「自由の生活」を持っていたのである。だから、もうそろそろボクが退屈した頃だろうと思うと、妻がお茶を持って来てくれる（その頃は、まだ子供もなく、新婚からそう間もなかったと思う）ぐらいの「生活のゆとり」はあったのである。

それがどうであろう。もう互いに「知命」をこえ「還暦」もすぎて、狭い三部屋の家に起居する身になっては、

灸すえてくれる老妻無慈悲なり

で、近頃医薬ではどうもならないような故障には、女房のすゝめで、灸をすえてもらっているが（それが案外きいているらしく、二個所ばかり、それで楽になっているが）何せ熱い時は熱い。それをボクが「あつゝ」とでも言おうものなら、女房の奴

「お灸は、熱いから利くのです」

とか何とか、いっぱし看護婦長のようなことを言いながら、無慈悲に次から次へと、線香で火を移して行くのである。

寝支度の妻に隻手の爪たのむ

交通事故で、ボクが左手を失ったのは、五年前であるが、それ以来ボクは、残った右手の指の爪がのびるのが、苦になってならなくなった。指の爪などというもの、案外のびるもので、一週間に一度は切らなくてはならない。女の子でもいれば「おい、爪を切ってくれ」ぐらいで、簡単に切ってもらえるのだが、大学生の男の子では、親父の爪など切ってはくれぬ。そんな雑用（雑用も雑用、案外時間をくう、めんどうな雑用）は、女房以外にはしてくれぬが、家の中の他の雑用の何かと忙がしい女房には、なかなかそういう手すきの時がない。夜、寝る前の、寝支度をした時が丁度そんなことによい時である。それを見はからって、眠たげな女房の前へ、ボクは爪のびた右手を差し出すのである。

10 7.)

## ボヤキ漫才

北川春巣

路郎先生が奥さんのことを書かれた「妻と語る」が本誌四四三号から連載されて、それを読んだ感激がまだ消えやらぬいま、お前の「妻を語れ」という編集局からの注文である。

路郎先生のおっしゃるように、（田山花袋もいった由であるが）若い時に妻のことを「語る」のはどうもべたべたして、余り読み物にもなりそうにない、と思うのである。しかし若いとはいっても私達ももう来年は結婚後二十五年、いわゆる銀婚を迎えようとしている。多少は感情を交えずに「妻を語る」ことも、やってやれないことはあるまいと思われる。

「語る」ことはすべて客観的の事実をもととしてなされねばなるまいが、妻の顔を見つめて、皺の数を数えるわけにもいくまい。結婚後二十四年経ったといえば、どなたにもその年令はおよそ見当もつくであろう。四年前、結婚二十年記念の年に、

妻はまだ老眼鏡を嫌い抜き

春巣

という句を作って先生に抜いて頂いた。もうその前から眼が怪しくなって、針のめども通りにくくなっていた。子供に頼んだりして用を足し、子供らにも「母ちゃん年やで」と冷やかされていたのである。それでも眼鏡はかけようとはしなかった。それが四年経った今年になって、いよいよやむなく眼鏡を作ったのである。子供らには「母ちやん皺がかくれて若返った」とまた別の意味で冷やかされているのである。

しかしながら体の方は至極丈夫である。これは夫として有難いことだ。結婚式の時には仲人は新郎新婦のことはできるだけほめるスピーチをするものである。私達の時にも新婦の頭のよさと共に、運動会の競走の時にも常に一番で、郡の選手権試合にも何度か学校代表で出場したことを話しておられた。私はその時、競走が早いことが何の役に立つだろう、と内心あまり感心はしていなかったのだが、今になって、スポーツで体を鍛えていたことが役に立っていると思うのである。よその奥さんが、体の調子が悪くて来院されるのを診察する度に、体の丈夫な妻を持ったことを感謝している。結婚するならば、女の人は頭のよいことも大切であるが、体の丈夫なことがもう一段と大切であると思う。

とはいうものの、四十才を過ぎると更年期というのか、体のあちこちにひびがはいるのもやむを得まい。頭の方へもひびがはいった

ものとみえて、近頃はとかく愚痴が多くなった。その愚痴もほんの些細なことなのである。そして同じことを何度でも繰り返す。いっても詮ないことばかり、いったがために事態がよくなる、というようなことではないのである。私はこれを「ポヤキ漫才」と呼んで、更年期のための頭の失調だろうと考えている。

女房のポヤキ漫才聞き流し
春巣

編集局からの注文は、「奥さんに叱られぬ範囲で語れ」ということだった。この原稿を妻に見せたら、これはちょっとも「語っていない」と笑われた。このへんでペンを擱こう。

## 敷かせてくれる

大鶴喜由

その頃の妻
新妻の烟れる中にみずみずし
不詳

それからの妻
福寿草松にしたがい候かしこ
葭乃

妻は至って健康でまだ寝ついた事のない程だ。僕が飯の炊き方を知らぬのもこんなところから来ている。近頃言う丈夫で長持ち型で、その上鉄幹好みと来ている。内証だが。

川柳は批評はするが作る意欲はないようだ。投句する時妻に見せて評釈の開きがある時はまた練り直すことにしている。でないと折角発信してもそれに近い意味の受信がなければ句とは言えないからだ。

妻は庶務会計課長であり、僕は外勤課長で、別名馬車馬と心得ている。しかし百円亭主ではない。

妻とは小さいいさかいはするが、まだなぐった事もなぐられた事もない。

妻は世間の尻に敷かれて暮している男性のいくじなさを心よく思っていないので、その点僕はワンマンでいられると言うものだ。

ルソーは『他人の好みにかなう妻でなく自分の好みにかなう妻を求めよ』と言われたが、このことでは僕は果報者である。

妻ちょう杭の綱の長さを廻るだけ

妻は留守だし今日こそはと翅を延ばして飛びたったが、杭につながれた綱の長さだけしか飛べなかった。ただ言えることは西が東に変っただけだった。

湯の山のカジカに妻も寝たろうか

職場の会で湯の山へ一泊旅行をした、お湯の加減は上々、呑めよ唄えよの大さわぎ、温泉芸者のサービスも至れりつくせりだ、ほろ酔いの僕は風を求めて手すりに寄る。折からカジカの声が聞こえてくる。このみどりしたたる山、このだんらんの溪谷が此処の庭である、ふと家のことを思いだす、こんないい気持に引きかえて遙か西の空の下で妻は淋しく家を守ってくれる、そして土産より僕の体を案じている。いま頃はもう眠りに就いただろうか——寝つきの悪い妻だが。

妻の笑顔そは満足かあきらめか

妻は何を言うてもよく笑って呉れる。それは心から満足しての笑いだろうか、ワンマンに今更どうしようないとあきらめての笑いだろうか、いやいや、ひょっとしたら捲かれた振りをして捲いているクセモノかもしれない。

女でない女女をはがゆがり

近所の娘さんが遊びに来ていた。たしか十五才だ。ふとしたはずみで妻を皮肉った。こんな言葉は二人でよくやりとりするのだが、その娘は怒った。「おばちゃんあない言われても黙ってんの、なんとかいよし、うちやったらぼろかすにとっちめてやるわ」女でない女には女の気持を汲みとれない限界がある。

めったに女女をほめず

市場からの帰りか四五人の女房連が此処で別れる立ち話に花が咲いている。僕はすり硝子越しに聞くともなく聞く。連れが一人去るとそれをけなす、また一人去るとそれをそしる、その中にうちの女房の声もいる。

妻の気の立つ日の子供あわれなり

妻は何か僕との間に心に満たされぬものがあるのか、気が無しゃ苦しゃしている。そこへ気嫌よく子供が帰って来た。いきなりそれをつかまえてあたることおびただしい。何が何んだか子供は判らない、ただ目を白黒しているばかり、そんなことが度重なって子供は考える。親子の世界以外に夫婦の世界があることを——、

## 夫唱婦随の作句か

市場没食子

軍縮華やかなりし大正末期に、徴兵検査に甲種合格で航空隊に入営したり、日支事変では満州や広東地方に出征もした僕だが、背は低い方で、せめて妻は自分と同じ位の背のあるのが欲しいと思っていたが、さて貰った花嫁は大分僕より背が低かった。その代わり骨太で横巾があり「丈夫で長持ちする」健康型で頼もしい思いもした。然も背丈と横巾の均衡がとれて見苦しくなかったのは、何よりのとり得であった。

妻は生命保険がとってくれない血圧を持っているので自然にそうなるのかも知れないが、末っ子の後家育ちにしては珍らしく、スローモーで、僕の性急さのブレーキ役としては甚だ好伴侶である。両方の長所同志と短所同志をミックスして、いつも中庸を歩んだ故か、今まで大きな失敗もなければ、躓きもなく、来たことを思えば、スローモーまたよきかなと自賛している始末。

妻は良く言えば自然主義、悪く言えば、なり行きにまかせる性で、決して何事にも自然に逆うような無理はしない。早い話非科学的かも知れないが、風邪一つ引いても薬に頼らず、早寝で安静にして治療すると言う工合で、それでも治らない場合に、すゝめられて薬を服むと、平常薬を服んでいないので、薬は驚く程に良く効く。子供の入試にしても家庭教師を雇ったり、鼻ぐすりを使ってほん走と言う芸は不得手で、心配はしていても人様のように踊らな

い。例のスローモーと自然主義で無理をせず見守っていたんだろう。

一見人好しで弱々しさも感じるが、生活力は旺盛で我家の大蔵大臣としては申し分のない妻で、安心して僕が酒を呑めるのも原因はこゝにある。

妻は手に職を持っている。ぼつ〳〵やめる方向にもっていきながら、今もつづけている。本当にご苦労さんな三十有余年である。彼女の川柳は夫唱婦随であるかも知れないが、川雑が来た時に目を通すだけで、不知不識の間に作句のコツを覚えたんだろう、それも縫針の尻を押しながら、気の向いた時に作るのである。下手ではあるが川柳の一つも作句する気のある点を微笑ましく思う。

妻たっしや大なる尻も尊けれ
苦労とは思いませんと縫う妻よ
湯豆腐で妻が縫うてるそばで呑み
針の尻押して儲けた貯金帳
銀婚の今なほ妻の手内職
花便り和裁の妻の手が抜けず
妹の無口と妻の気が合わず
北海道へいく月掛を妻はじめ
若いのにまけずこっちも妻を撮り
終極の味方に妻がただひとり

## 社長の娘

若本多久志

「悟り終れば未悟に同じ」という言葉が、近頃になってようやく解りかけて来た私達夫婦である。

淡々として老妻の酌を受け

この句は一昨年還暦の時の拙作だが、この心境で語る筆には何の隠しだてもクレンもないことをお断りしておきたい。

さて語れば長いことながら今を去る三十六年前、一途に思いつめていた芸者との恋に破れて悶々の裡に勤先の社長が急死された。所が奇しくも亡くなるその前夜、自分の独り娘を私と妻合わせたいと奥さん（義母）に話されたことから、それが遺言の縁談となって迫って来た。

私にしてみれば「どうせ好きな女と添えぬなら誰と一緒になっても」という気持に、多年ご恩になった亡き社長への報恩と心得て、当時十九才、女学校を出たばかりのまだ乳臭い娘さんと三々九度の盃を交すご縁とは相成った次第である。

爾来幾星霜、銀婚記念旅行に北九州へ行く別府航路の船室でしみじみ話し合った時、

「貴方と別れてしまおうかと思ったことが三べんあった」と私の若い頃の旧悪を克明に——女房族独特の記憶力で列挙されたのには只々、恐縮、頓首の外はなかった。

それからも更に拾年余り、思えばよくも堪え、よく忍んでついて来てくれた事よ。

病は治っても浮気ばかりは治らず

揶揄されている女房の倖せさ

などと詠んでいゝ気になっていた自分が恥しい思いだ。

今は二男二女（長男夭折）も、末っ子の大学生を残してそれぞれ分家したり、嫁いだりして、

嫁がせてもとの二人になる暮しと誰かの句の様な昨今の生活である。

然し私はまだ、老化現象も稀薄で、若い血汐がみなぎり、美人を見れば美しいと思うし、食べたいものがあれば車を飛ばしても食べに行き、眠たくなればどこでもゴロッと寝る、自分の日常は相変らずのワンマンで、この後も又何年か苦労をかけることであろうと済まない気持で一っぱいである。

せめてもの贖罪にと二三年前から年に三四回、同伴旅行によってお慰め申しあげている。昨年も沖縄、北海道、南九州とそれぞれ十日間位の小旅行、今年の正月は私がハンドルを持って、広島、山口県周遊のドライブ旅行に出かけたりしてアルバムにいい思い出を残した次第である。

—十月十日記—

妻を詠んだ句

茶をいれて何か言いたい妻の顔
お二人さんご案内老妻と飯を食べ
晩酌をやめればどこぞ悪いのん
時速四十今日は女房を乗せており
女五十ハンドバッグがまだ慾しく
足るを知り今の女房を大事にし

## 錨の如し

橘高薫風子

結婚当時僕は五尺六寸、十六貫五百、妻は十三貫五百、合せて三十貫であった。現在では僕は十二貫五百で痩身鶴の如くだか、妻は十七貫五百、やはり合せて三十貫になる。（十月末に出産の予定なので本当は七十瓩、十八貫七百なのだが平常の時コンスタントに十七貫五百である。）体重の推移とともに権力もおのずから移行して、今では屢々索莫とした思いにさせられることが多い。僕は僕と結婚する女性の資格の一条件に足の美しいことを入れていた。僕は女性の、丁度下駄の上に載るだけの足の部分の形に、顔の美醜よりももっと神経を配る、そういう性格的なものがあった。痩せた神経質な足指、太く短かいまるで生薑のようなのなどを見るといらいらしたり悲しくなったりするのである。妻は先ずこの条件に適っている、肥り過ぎた今でもかっこいい足指をしている。

大阪の下町育ちなので経済に関しては締りのある方だ。下着などはオール問屋でかためて買う。値切るのは心得たものだ。併し、鷹揚なところもあって、数年も前のことだが歯医者に通っていたと思ったら四万円を越す請求書を持って帰って驚かせたりする。また、下町的だ。たこ焼お好み焼が好きである。

芝居、こんにゃく、いも、たこ、くり、○○、なんきん、と俗裡で言う女の好物は、なんきんを除いた外は大いに目がない。趣味は、いろいろと変っていって、今は大いに刺繍すき、子供の持物をはじめ狭い部屋は満艦飾である。

この十月末に三人目を生むが、上二人が女なので是非とも男児を出産して欲しく、僕は五月頃、横山大観の名画の「村童」をなぞらえて制作された、腕白な、それでいて気品のある面構えの童像を買って来て、胎教に資したつもりでいたりしている。男児を生めば、オリンピックの金メダルものだ。妻よ。フレー、フレー、フレー。

子が病んで錨の如し　わが妻は

妻がもう口あけて寝るようになり

妻の影　わが影　この世おもしろし

# 栢筵・蓼太・一茶

## ―古俳句と古川柳（五）―

冨士野鞍馬

### 市川栢筵

栢筵といえば、二代目市川団十郎の俳号である。初代団十郎の子で、元禄元年（一六八八）戊辰の生れ、本名は堀越十兵衛、襲名の前は九蔵と称えた。成田屋と号し、成田不動を厚く信仰し、市川家の基礎を築いた人といえよう。

ある時下総真間の紅葉見に舟で出かけ、市川の番所を通る時、役人が「通れ」といったのに対し、

通ります通らばままの紅葉哉　栢筵

と詠んだ。それで、この番所が有名になったということである。これを川柳には、

返答をすぐに栢筵紅葉哉　（雨譚、傍三32）

通りますきくとはくえんかんがへる　（安九梅3）

通ります通れに昼寝起される　（東子、一二四28）

市川でしばらくといふ角かづら　（乙一二六23）

市川で暫くといふ成田連レ　（佃リ一二一23）

などと、十八番の「暫」を利かせても詠まれている。

正徳四年（一七一四）絵島問題で、同座の俳優生島新五郎が、三宅島へ流罪になった。その配所から栢筵へ干魚を送ってきた。それにつけて、

初松魚からしもなくて涙かな　新五郎

と詠んであったので、

そのからしきいて涙の松魚哉　栢筵

と返句した。（栢筵集）

それをまた川柳は、

一トからげ涙のとどく島干もの　（雨折四一12）

江戸と島からしにないた初鰹　（芋洗八四34）

と詠んでいる。また、

初あられ銀ならまごもひらおふに　栢筵

に対し

はくえんはにわかあられに馬であひ　（安九礼4）

と川柳に詠まれている。

歌舞伎十八番の内九番までは、この栢筵の創演で、宝暦八年（一七五八）九月二十四日、七十一才で没した。

### 大島蓼太

大島蓼太は、本姓吉川氏、通称平助といい、享保三年戊戌（一七一八）信州伊那大島の生れである。嵐雪の高弟吏登の門に入り、延享四年（一七四七）許されて雪中庵三世を名乗った。門人二千といい、柄井川柳も少時蓼太の門にあったといわれている。天明七年（一七八七）九月六日七十才で没した。本所松井町要津寺に、墓と句碑がある。

その有名な句に

世の中は三日見ぬ間に桜かな　蓼太

があり、それをふまえて川柳は、

御子息が三日みえぬは桜かな　（柳糸一〇二40）

と息子の吉原流連が詠まれ、

三日見ぬ間に花の咲く仲の町　（万仁四四8）

と吉原の桜が詠まれている。

吉原の桜は、咲いたのを植え、散ると抜いてしまうのであった。

### 小林一茶

小林一茶は、俳諧寺とも号し、本名は弥太郎。宝暦十三年癸未（一七六三）五月五日、信州上水内郡柏原村農弥五兵衛の長男として生まれた。三才の時母を失い、八才の時継母が来てから、孤独をかこつ性質になった。

我と来て遊ぶや親のない雀　一茶

は、その八才の時を追憶して、文化十年（一八一三）五十一才の作である。

十四才の時、知人につれられて江戸に出て、どこかの丁稚に住み込み天明七年（一七八七）二十五才には、二六庵竹阿の門にあって、「白砂人集」を手写し、小林圮橋と署名している。寛政四年（一七九二）京阪、四国、九州方面へ俳諧行脚に出かけ、その時俳諧寺入道一茶坊と号したのである。

江戸では、甲逸の性格と洒落の句風で、一部に認められたが、宗匠たる一家をなすに至らなかった。夏目成美の家に寄食したり、上総下総の門人を訪ねたりしていたが、文化十年（一八一三）長い間の義弟との争いも解決し、祖先の家を二つに仕切って住むこととし、江戸を引き払って、初めて妻帯したのである。この時一茶五十一才。郷里には落着いたが、生れた子は次々と死に、妻も死に、再婚の妻とは離婚するなど不幸が続いた。六十五才の夏火災に遭い、焼け残りの土蔵の中で、再度の中風のため、文政十年（一八二七）一月十九日に没した。

一茶の句は、川柳以後であるから、川柳風に近くなっている。

大根引大根で道を教へけり　一茶

は、一茶が生れるより前の宝暦十一年に

ひんぬいた大根で道を教へられ　（初18）

が川柳に既にある。

何のその首も取るまい大晦日　一茶

は、一茶二才の年明和元年の川柳、

大三十日首でも取ってくる気なり　（三5）

が先行している。

舟が着いて候とめくる蒲団かな　一茶

には、既に天明八年、一茶二十六才の時に、

舟がついてそうろうとぶら持って来る　（二三24）

があり、

子規我れ汝を待つこと久し　一茶

は、天明六年、一茶二十四才の年既に、

貴公を待つこと久しと二十軒　（二四16）

がある。

これらの句は暗合であろうが、一茶以前に川柳のあったことを、世人に知らせておきたい。

麻生葭乃先生の柳話

# 川雑 婦人友の会十周年の集い

於 宰相山町 西出邸

十一月十五日、文化の秋にふさわしい、菊日和の一日、川雑婦人友の会の十周年記念句会が、会員の西出一栄さんのお宅で和やかに行なわれた。工場から矢印に添って裏手へ廻ると玄関、新築とお見うけする部屋部屋の廊下には、真赤なじゅうたんが敷きつめられ、先ず来客の目をたのしませてくれる。

一栄さんの良きアシスタントである清子さんが、今はミセスの愛嬢と共にマメマメしく今日の世話係をつとめて下さっている。

部屋の額には路郎先生の「俺に似よ俺に似るなと子を思い」の名句が光っている。

「こんにちわ」「いらっしやいませ」「本日はいろいろと……エトセトラ…」女客の挨拶は長い。

別室をのぞくと、もうちゃんと葭乃先生や阿茶さんが坐っておられる。いつもながら時間厳守の先生ばかり。やがて当主の一栄さんが御主人様と現われる。良きご主人の理解の下に福々しい一栄さんの顔もほころぶ。

つゞいて徳子さん、みね子さん、良子さん、遠路はるばる酔夢さん（香川県）の顔が並び、十周年の気分が盛り上がって来る。

席題の一ツ「七・五・三」は今日がその当日、そう言えば途々、可愛いい女の子に遇ったことが思いかえされる。

並べられた机の上には各自に、みかんとおみやげ、津の清のおこしがおかれてある。

葭乃先生の金婚をお祝いする祝吟の〆切が終わって一同座につく。こゝで名カメラマンのご主人が記念写真をとって下さる。

清子さんの司会でいよいよ開会、先ず例年にならい、三十八年度金泥集の皆勤投句者の表彰、金泥集の十二ヶ月マラソンの最後まで頑張ったものへ、ご褒美として葭乃先生から短冊が贈られた。阿茶・一栄・清子・みさ子・きさ子の五人。しかしその数五人とは一寸さみしい。

わたしらもいたゞけるんですかと誰かゞ横から顔を出す。「皆勤者やないとあかしまへんねん」と阿茶さんが苦笑。

表彰が終わり葭乃先生から意義あるご挨拶を伺う。金泥集への投句の心構え、作句と句の向上、句会場への出席と視野の向上、すべてにおいてもっともっと物を見る眼を養わねばならないと、一つ一つが胸に泌み入る思いで拝聴する。十周年を迎えた友の会もこれを機会に一段と新しい境地へ伸びてゆかねばならないと深く肝に銘じる。

柳話が終り、一同の祝吟と心ばかりの記念品を受け取っていたゞく。松にしたがう福寿草の今後もますますおすこやかなれと祈らずにはおられない。

午後三時、各題の披講がはじまる。選者それぞれ持参の賞品が山と積まれ、つぎつぎとうれしい入選者の声がはずむ。

兼席題の披講が終わったあといよいよお待ちかねの懇親宴に入る。

塗りの箱に入った風変りなちらし寿司とお吸い物を前に、一同先生のご健康を祝して乾盃。一通りお酒のまわったところを見はからって、各自の十八番が出かゝる。

先ず、一栄さんと清子さんが、今日の日を祝って「柔道一代」のお見事な替え歌を披露する。そのウィットに富んだ歌詞に先生も感心される。

写真説明—前列向つて左から酔夢・きさ子・一栄・葭乃先生・阿茶・操子
後列左から春栄・徳子・千夏・清子・みさ子・みね子・〆女・良子

つゞいて一栄さんのご主人がゲストとして、得意のノドをきかせて下さる。歌は五月みどりの「おひまなら来てね」その若々しいムードに一同アッと声を上げる。つゞいての舞踊は酔夢さんの「白鷺の城」仲々達者な舞の手に一同うっとりと見入る。

さて本番の葭乃先生は「俳聖芭蕉」という仲々しぶい舞踊、旅に出た芦蕉のひょうひょうたる姿をうつした舞の手ぶりに一同しーんとなる。

『すぐにおぼえて仲々忘れない師匠泣かせのお弟子さんとは葭乃先生のことでしょう』とは、良子さんの弁。この間、一栄さんのご主人が8ミリを持って、縦横無尽に活躍して下さる。

つゞいて徳子さんの詩吟、千夏さん一栄さんの謡曲、みね子さん、きさ子の舞踊、〆女さんのいつもながらの美声に、春栄さんの歌謡曲、『主人の伴奏があればもっといい声が出るのに』とアケッ放しのおのろけに一同ギャフン。

さて順番もいよいよ大詰めになり、最後まで、首を横にふっていた阿茶さんに三味線がつきつけられる。とうとう観念して正面に出た阿茶さんは爪弾きで唄い出す「重ね扇」たちまちその声は名取り「芝阿茶」さんに早替り、タメ息の出るような美声に一同うっとりとき、入る。さて最後はどうしても踊らないという良子さんのかわりに先生が、もうひとさしおまけにおどって下さった「河太郎」いつかの「おてもやん」に似て、その軽妙な踊り振りにヤンヤの拍手が湧く。時に午後六時。いくら話しても名残りつきない秋の一日が早くも暮れ、引きとめて下さる一栄さん宅を後にした一同は再会を約してそれぞれ夜の灯の中に消えて行った。

**兼題「十」　葭乃選**

仲人の話十が多すぎる　すみれ
十字架を下げて乙女の胸しずか　一栄
末っ子が十だまだまだ死なれない　周甫
苦労した過去が十になる生活　勝子
十年目あえば白髪を笑い合い　徳子
十円が合わず夜食もして調べ　富士子
十円で子供をいなしパチンコ屋　良子
十までをよまして孫を風呂に入れ　みさ子
十代を越すや越さずで母になり　あいき
十周年この感激をつゞけたし　春栄
十年目まだ気心が読みとれず　春栄
十点をもろといでやと送り出し　良子

**佳句**

一を言うて十を知る児でこわくなり　〆女
十人をぬいたものまねプロに入り　みさ子
十年余あれ程燃えてた恋ぼやけ　酔夢
十代の恋ハラハラと見守られ　操子
十代の意見プランを狂わせる　操子
(人)朝露をふんで家計を十する　みね子
(地)見返してやる気十年故郷を捨て　きさ子
(天)十代の脚光あすを考えず　阿茶
(軸)十中の八九あぶない競技に出　葭乃

**兼題「P・T・A」　阿茶選**

(人)親馬鹿のサンプル多いP・T・A　清子
(地)先生の恋が不潔なP・T・A　きさ子
(天)ハイハイと母に見せたい手があがる　酔夢
(軸)P・T・A着物でごててパパがゆく　阿茶

**兼題「ひとり」　操子選**

(人)月光に私一人の路があり　〆女
(地)初七日を済ませひとりの部屋が冷え　きさ子
(天)ミスひとり気焔を上げてるクラス会　酔夢
(軸)孤独いま娘等がやさしくしてくれる　操子

**兼題「読書」　良子選**

(人)嫁の座にあって読書は気を使い　酔夢
(地)白粉気なく豆本を手放さず　阿茶
(天)哲学書読み耽ける子が案じられ　清子
(軸)読書のほかにアクセサリーとしても買ひ　良子

**兼題「我ままー」　きさ子選**

(人)我まゝがとおってからの一人ぼち　春栄
(地)わがまゝが通らぬ時は祖母へ来る　阿茶
(天)我がまゝの通せるくらし味気なし　操子
(軸)本当の恋か我がまゝおとなしい　きさ子

**兼題「宝石」　一栄選**

(人)宝石を買って浮気に抵抗し　すみれ
(地)宝石に夢を托した婚約期　徳子
(天)宝石に縁のない娘が光ってる　千夏
(軸)見返へしてやる気のダイヤ小さすぎ　一栄

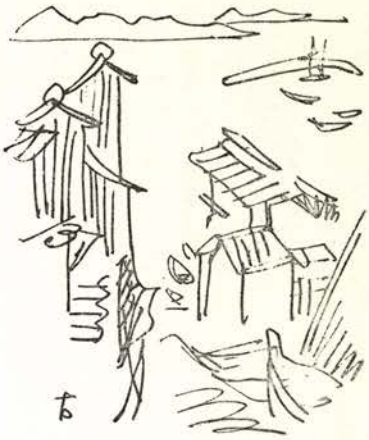
**席題「七五三」　酔夢選**

(人)山茶花へ並ばせて撮る七五三　きさ子
(地)七五三飯り本尊寝てしまい　一栄
(天)七五三始取り上げられた晴着の子　清子
(軸)七五三良縁たのむ気の早さ　酔夢

**祝吟**

句作一路手に手をとって五十年　千夏
心から金婚祝して初投句　お悦
舞扇古稀とも見へぬ腰の線　周甫
金婚の祝盃互になみだぐみ　〆女
悠々自適して金婚を迎へたり　良子
五十年の歴史へ捧げん金メダル　富士子
金婚の天与嬉しき共白髪　勝子
金婚は趣味と愛との二人づれ　阿茶
あなた鶴わたしは亀の目出度い日　きさ子
柳歴にページを添えて共白髪　みさ子
五十年添うて情熱燃えに燃え　酔夢
金婚の舞扇(せんす)のお腰たしかなり　一栄
金婚式夫唱婦随でつつがなし　春栄
福寿草松に従い五十年　操子
金婚へ歩巾合わせてゴールイン　清子

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸



# 江戸川柳と紋章

阿達義雄

## (一) 柳多留におげる宝暦期の紋章吟

宝暦の頃は小形紋様を染め出した小紋流行の時代で、霰小紋・鼠小紋・鶉小紋・憲法小紋・縞小紋等の色々な小紋染が行なわれていた様である。『柳多留』初篇にも、

○よい小紋着て紺屋迄引きつられ　（初17・）

○母の気に入る友達は小紋を着　（初・18）

などの句が収められており、この外に、女性の衣類につける紋所にしても、糸で縫い出した縫紋が美的なものとして喜ばれ、若い女性は自家の家紋に拘泥せずに、優美な紋をつけていたことは今と同様であった。これらのことは、

○縫紋を乳をのみのみむしるなり　（初・10）

○紋所にわたくしのある長局　（二・17）

右の川柳点によっても知られることである。

又、町人が晦日の晩など、その家紋のついた弓張提灯をもって、掛取りに走り廻っていた情景を詠んだ句に、

○借りのある家へ提灯紋尽し　（初・20）

という句が見え、この句は、元来、川柳評万句合に於いては、「かけの有ル家へてうちん紋尽し」として出ていたものであり、この前句題は「どうぞどうぞとどうぞ」であった。

右に引用した小紋の句は、家紋と全く関係がないから別のものであるが、右の様に紋所を詠んだ句にしても、これらの句には未だそれが如何なる意匠図柄の句であるかゞ少しも示されてはなく、たゞ漠然と家紋が詠まれているに過ぎなかった。

これらの一般的な紋の句に対し、この頃の句で、紋章名を臘げながらも意識して作った句が『柳多留』二篇に三句発見され、これらは、いずれも宝暦十三年の万句合から採られたものである。

『柳多留』に最初に現われてくる固有紋の句は、

○げじげじは二疋並んだような紋　（二・12）

右の様に、梶原の矢筈紋の句であって、げじげじの紋は、げじげじが二疋並んだ様な紋であるということを意味しており、「げじげじ」とは判官義経の敵役たる梶原景時やその一家に対する綽名であった。そして、この様な句が歓迎される基盤として、次の様な句が見られ、

梶原が塀には毒を書き散らし　（二・7）

腰越でもの喰ふものは馬ばかり（二・13）

梶原と火鉢の灰に書いて見せ　（二・31）

右の最後の句の前句題が「恨み社（こそ）すれ恨み社すれ」であったことを留意すべきであろう。

梶原の矢筈紋は矢筈を二本並べた紋様であるによって、その紋を二疋の「げじげじ」に見立てたものであり、又、梶原を「げじげじ」として嫌っていたのはこの頃の一般民衆の意識でもあった。

川柳点に於いて、その者の紋章が綽名的に呼ばれる端を開いたのは右の句である。

次に、源頼光の四天王の一人、渡辺綱の紋は一般に「三星に一」（∴）として知られていたので、

○四天王渡辺ばかり紋が知れ　（二・17）

尤も、これは渡辺の紋が∴として知られていたからの類推かも知れない。

○たばねのし釣鐘堂にのたを打ち　（二・23）

右は、娘道成寺で名声を博した二代目瀬川菊之丞の舞台姿を詠んだもので、束ねた飽熨斗（のし）が束熨斗だが束熨斗の紋は結綿紋によく似ていたので、右の様に言ったものであろう。

宝暦期の川柳点の中で、特定の紋章、つまり固有紋を詠んでいる紋章吟は右の三句に過ぎず、右の三句も多くの川柳点の中に、偶然詠み出されたという感がする。

その証拠に、これらの三句の文字面には、矢筈、三星に一、結綿等の片言隻句も見出すことが出来ない。

これは、前句綱の附句に過ぎなかった関係かも知れないが、まだ創成期にあった川柳点のことゝて、吟者がそれぞれ思い思いの句を案じて、特に或る紋章を詠み出そうとしたり、或は、それ以前に紋章吟らしい

先例が殆んど存在しなかった結果であろう。

然う考えてみると、一般に、固有紋章吟の解釈は直観的には困難なのではあるまいか。

## (二) 柳多留における明和期紋章吟

明和元年の川柳点は宝暦十三年の川柳点と共に「柳多留」二篇に収められており、以降明和期の句は「柳多留」の九篇迄にわたって採られているから、宝暦期の句の数倍に及んでいる。

従って、明和期に多くの紋章吟を見るのも当然なことであるが、この期に至ると風俗的にも紋章に対する好尚が次第に高まって来ている様に感じられる。

小形紋様として考えられる小紋にしても、

○小紋がた瞽女は多分の方へきめ　(四・九)

○お袋は拝まれて出す小紋無垢　(六・28)

○労咳の顧ひは鼠小紋なり　(五・36)

などを見ても、小紋流行の有様が知られ、又、美的な縫紋については、

○縫紋をさぐらせて見る瞽女の母　(二・20)

○縫紋の事で桟敷を二日延べ　(五・20)

とあり、女性にとっては、その着物の柄など同様に重大関心事となっていた。

この期に於いて、注意すべきことは、庶民の射倖心を狙った当て物の「紋つけ」という小賭博が行なわれ流行の徴候を見せ始めたことであり、このことは、歌舞伎役者の家紋がその芸名と同じ様に把握されていたことゝも関係がなかったとは言われない。尤も、この期の「紋つけ」の句は、

○紋つけを亭主が取って静かなり　(四・35)

右の一句くらいなものであるが、役者紋の結綿、鶴の丸、封じ文などの川柳点の出現と考え合わせてみると意味の深いものがあり、この句は、反面に於いて、女房や下女が紋付けの賭物を取った際は大騒ぎであったことを意味している。この句の前句題は「はづかしい事はづかしい事」となっており、一人前の亭主が紋つけの賭物を得てじたばたしては見苦しかったことを示唆している。

次に、「紋々の絆纏」を詠んだ句があり、

○紋々の絆纏飾物を売り　(八・7)

＝クリカラ紋々を想わせる様な刺子の絆纏などを着た者が半ば押し売り的に正月の飾物などを売っているとか。

その他、暮の定紋、単なる殿様の紋を詠んだ平凡な詠風の句としては、

○桶と花捉げて定紋見てあるき　(三・9)

○衣から殿様の紋透き通り　(六・17)

——筆者・新潟大学教授——(続く)

# 金集泥

麻生葭乃選

「下駄」

下駄はいて踊る花道　自信つき　阿茶
高下駄がそろって湯にゆく○時すぎ　同
五つこはぜ細目の柾をはきこなし　同
白鼻緒待夜まつりの下駄そろえ　同
下駄屋程もたせてやったお嫁入り　同
下駄箱で畳表が色変り　一栄
手のひらへ一足のせた孫の下駄　同
嫁入りへ履かぬ下駄まで取揃へ　同
こっぽりの鈴が嬉しい七五三　同
宿の下駄ゆるい鼻緒のまま出掛け　同
野次馬の下駄片ちんを意識せず　春栄
桐下駄に敬遠される十文半　同
黒塗りが似合う素足の憎い人　同
高下駄の音がきしんで出前着き　同
仲人に立てゝ社長に下駄預け　清子
下駄履いて日曝足もくつろぎぬ　同
お使いが下駄履いてるのに礼を言い　同
ゴム長ぢや板場の感じピンと来ず　同
初孫へ半年早い下駄を買い　きさ子
嫁が来てうちにも赤い下駄が増え　同
穿きかえずに来た下駄遠慮ばかりして　同
下駄さげて夕方飯る草野珠　徳子
常ばきの下駄先様にそろへられ　同
神殿の前新聞で包む下駄　同
おそまつな庭下駄借りて松をほめ　酔夢
湯の街でパチンコ探す下駄の群　同
カラコロと高下駄集金らしいビル　同
下駄はいてせいの低さをカバーする　周甫
下駄はいて行けと言うのに雨になり　同
盛装の嫁に姑さん下駄揃へ　同
サングラス今日も女の下駄をはき　美代
上る気でなかったみみちい下駄をはき　同
母の下駄十一文が容赦なく　同
ふり切ってチンバの下駄でとんで出る　花梢
あすかへる土産をさげた宿の下駄　同
ビルの中下駄ばき姿忍び足　トメ子
ゆかた着てサンダルはいて下駄買いに　同
はなを切れた事から二人の恋芽ばえ　みさ子
ハイテーン下駄まで流行おいまわし　同
靴で来て雨の仮りを母の下駄　あいき
コッポリを買うて晴衣は後廻し　同
客の下駄一方くわえて仔犬逃げ勝　子
ツイストが大好というこっぽりの舞妓　千夏

**次回題「別荘」〆切十二月末日**

金泥集への投句は川雑婦人友の会の会員に限る。入会希望者は大阪市南区二ツ井戸町二三山川医院山川阿茶理事長宛に申し込まれたし。会則をお知らせする。

(電話大阪二一一局四五四三)


**柳箋**

本誌への投句はなるべく柳箋をお用いください。選者が選句されるのに整理上助かると云っておられます。

一冊(五〇枚綴)三〇円
送賃一冊毎に二〇円

川柳雑誌社サービス部

# 川柳にあらわれた成人病（下）

若林草右

血圧でいつも問題になるのは酒と煙草であるが、煙草と血圧を詠んだものは一句も見当らず、酒が独占している。

ひかえていろという血圧の飲みっぷり　八九寸

メートルが上れば血圧など忘れ　十悟

血圧を角の酒屋で忘れて来　東洋男

血圧がおどおどと飲む小ジョッキ　どんたく

高血圧とは見えぬ立派な飲みっぷり　七面山

献盃へ高血圧をふと忘れ　同

只酒のたたり血圧上って来　甲吉

血圧がどうのと一本減らされる　多久志

酒は呑みたし血圧怖しという句が多いが、果たして酒は血圧を上げるであろうか。

日本でも高血圧と脳卒中で有名な秋田県と、反対に少い背中あわせの岩手県で行なわれた東北大学の中沢教授の統計によると、酒を飲んだために高血圧症になったという結論はでなかったが、高血圧症のものが飲酒を続けると血圧はますます高くなり、動脈硬化は促進され、そのため卒中や腎硬化症や、心筋梗塞などを起こし易くするという。高血圧症は遺伝が非常に関係する病気であるから、そういう遺伝のある人は、たとい血圧が高くなくともあまり飲まない方が賢明といえる。

高血圧を怖がるのは高血圧そのものでなく、その結果続発するいろいろの厄介な、時には生命にかかわる病気があるからである。その一つに脳卒中がある。これは初めに述べたように死因別統計の第一に掲げられている程老人に多く見る病気であって、脳出血（脳の血管が破れて出血する）と脳軟化（脳の血管がつまって血行が杜絶する）がある。ともに脳動脈の硬化が原因となっている。健全な血管は一四倍の血圧上昇に堪えるといわれているから、普通に見られるような高血圧で脳出血を起こすのは動脈が脆くなっているためである。脳動脈の変化は直接見ることはできないが、それと兄弟分の動脈が眼底を走っているので、眼底検査で推測することができる。脳出血でも、脳軟化でも死亡するものが多く、たとい生命をとり止めてもいわゆる中風という状態になって余生を人の厄介になり寂しくおくらねばならない。

中風の出た親分でほっとかれき　堰子

脳溢血あいつがかいと猪口をお　一瓢

恩給へやっととどいて中風が出　可住

にぎにぎをせよとくるみをもらいけり　千容

いいのこすことも忘れて脳軟化　同

にぎにぎの句は中風の患者が手の握力を強くするためくるみを貰ったという句で、一時麻痺した手足でも動かす練習をすると一程度回復するもので、中風の治療に触れた句は珍らしい。

次は成人病として死因別統計第二位の癌であるが、癌の原因についてはいろいろの学説があり、最近はビールス説がマスコミに跳っているという感じであるが、ほんとの原因は不明というほかはない。癌は人体のどの部分にも発生するが、日本人に多いのは胃癌である。セントヘレナの孤島で恨みをのんで死んでいったナポレオンは胃癌であった。彼の父、姉、弟、及び妹二人がやはり胃癌で死んでいるので、癌の遺伝の例としてよくひかれるが、遺伝のない人でも癌になる人はいくらでもある。また近頃発癌物質が次から次へ発見されて来たが、日本ではすでに大正四年に当時の東京帝大の山極教授が市川厚一博士と共に兎の耳に根気よく石炭タールを塗布して皮膚癌発生に成功している。

癌できつ意気昂然と二歩三歩

と山極博士はその時の感激を句にしている。石炭タールの発癌性がまだ一般に知られてなかった時代であったので、反論を唱える人も多かった。

癌か贋かはた頑かと揶揄した人もあった。

癌は早期発見、早期手術以外には打つ手がないと言われているが、この早期に発見するということが、最近の診断法の進歩にもかかわらずなかなかむつかしい問題で、手術により根治できる程の早期に発見することはまだ困難のようである、従って一般には不治の病と考えられ、患者には極力病名を明かさないのが原則となっている。

癌であったかと死ぬ際に思い　いわを

名優以上胃癌の母へ気を使い　しげお

妻までが癌ではないと嘘を言う　遠　二

ガンでないと母の偽りきくベット　藤　波

ガンは無しとハッキリ妻の目が言った　遠　二

癌の母へ来たオタスケに頭下げ　しげお

孝行の最後は癌え火をつける　しげお

癌で逝きはったと二号あわてず　七面山

いつ癌になるかも知れぬので遊び　春　巣

同級がもうガンになる年になり　むじな

仏だんを焼いても癌は死ぬ創価　野迷路

癌の記事を穴のあく程見るも年　七面山

右の癌の句の中にははっきり胃癌と書いたのもあるが、どこの癌か明らかでないものもある。しかし一応最も多い胃癌としてさしつかえないと思う。癌という病名を患者に知らさないように苦心している光景がよく現われている。こういう点で医者が癌になるとごまかすのに困ることがある。

はっきり癌とはいえないが癌になる可能性のある胃の病気がある。胃潰瘍、萎縮性胃炎、胃ポリープなどがこれで、医者の方では前癌状態といっている。こういうあやしいものは常に定期的に検査して、場合によっては早く切ってしまう方がよいという人も多い。

胃袋の穴から命洩れんとす　灯　竿

持病の胃会うたび医者は切りたがり　晃　男

切りましょうと外科医は楽しそうに言う　弘　道

初めの句はおそらく胃潰瘍の出血か、穿孔であろう。即刻手術の必要がある。持病の句は、慢性胃炎と思われる。第三句は必ずしも胃病とは限らないが、前癌状態の胃病とも解せられる。医者は必要がなければむやみに切るものでないことを強調したい。

胃癌の句程多くはないが肺癌の句もある。

たばこ屋は癌になろうとなるまいと　旅　風

肺ガンと税金だけを喫って捨て　涼　人

愛煙家肺ガンくらいで驚かず

近年肺癌が急増したことは欧米でも日本でも同様である。例えばアメリカでは一九三五年肺癌死亡者は四〇〇〇人であったものが一九六二年には四一〇〇〇人に増加している。日本でも一九四五年六六七人が一九六三年には六二一二人と約一〇倍になっている。これは肺癌の診断が的確になって従来肺炎、結核、喘息などいわれていたものが癌であったこと、又平均寿命の延長から癌年令層の増加というみかけ上の増加の他に実際上にも急にふえている。その原因の一つとして喫煙者の増加が挙げられている。欧米に於て煙草消費量と肺癌の発生率はほぼ平行するという。またアメリカのグラハム博士は肺癌の九五%米国癌協会の発表でも八〇%は喫煙者であると発表し、原因はおもに紙巻煙草にあって葉巻には少ないといわれ、マドロスパイプが底をついたという新聞記事もあった。日本では煙草は専売事業で税収入の主要な部分を占めているので、公社でも政府当局でも頬被り主義をとって来たが、最近になってこの問題が喧しく議論されるようになって、おそまきながら専門家に委嘱して調査に乗り出したところである。結論がいつ出るか判らないが、過渡期の窮余の策としてフイルター付の紙巻煙草のホープやハイライトに力を入れ、近々フイルター付ひびきを売り出すということである。

今迄の欧米の研究結果を纏めると

一、紙巻煙草に発癌性物質（ベンツピレン）が多く、葉巻や、パイプで喫う場合には少ない。これは燃焼温度が紙巻の方が高いためである。二、多量（一日二〇本以上）の喫煙者（ヘビー・スモカー）で長期にわたって愛用する者に多い。三、急いで喫う場合は燃焼度が二～三百度も高まるため発癌物質が多くなる。四、根本まで喫わずに1/3位で捨てると残りの2/3がフイルターの役目をして害が少ない。

以上のようなことがいわれている。

マック・トーフェンが「禁煙はたやすいことである。自分は千回以上もこれを実行した」というように、中々むずかしいことであるがどうしても禁煙できなければ、以上述べたことから上手な喫い方をして、少しでも害を少なくすることが望ましい

大体以上で私の申上げたいことは終わったわけであるが、最後に患者の眼に映じた医者の姿を句に求め自省の資としたい。

院長のサジうどん粉で眠らされ　鳴　光

ひにちぐすりとは気の永い御託宣　翠　光

返事できぬのに歯科医よく話し　鉄　児

泰然と誤診していつか癒しとり　清　生

小児科医こどもこわがる髭おとす　静　馬

新国道外科医またまた増築し　宗太郎

病院を変えるにさえも嘘がいり　弘　道

開業医株の相場も診にやならず　どんたく

お買物は近鉄へ！
アベノ・上六
近鉄
アベノ621-1231
上　六771-3331

# 人生譜

尼ケ崎市　高田千穂

黒を着て今駈け去って行くこころ
少しおしゃれな　叛いて歩く靴を買う
淋しさが手応えのない　竜頭巻く
紅葉燃す　過去の葬りはたった一人で
わが母の露地から出ない子守唄
巣づくりを急がねば　ホラ　木枯の音
不意に傘畳みたくなる　土砂降り

兵庫県　常岡孝風

夜の譜

てのひらにタンゴが眠る忘却と
強烈にジルバ軍靴の日が耳に
タンゴ軽快孤独を仕舞う秋無限
夜の縮図ドラムが狂う　狂いたし
ブルースの思い出恋が掌をこぼれ
トランペット無精にバカと叫びたい
ジルバに酔うその日は手形割った日だ

大阪府　早川清生

マヤ帝国の裔がはだしでゆく舗道

## 河野春三選

人権の底を共産軍進む
朝　隣も手を振って出る男
地球の皮を削ってて詩だの愛だの
歴史書かれはじめ　たたかい書かれつぐ
秀才の家訪い兄の凡を見る

羽曳野市　戎川太郎

星降る夜　歯車一つ墮ちて行く
流星の刃　星辰の貌を断つ
水流れ時去り　埠頭に有った私
台風に金色の眼　サタンの微笑
太古の石棺動き　ロボット止る

今治市　月原宵明

掌に隠れるほどの理性が残っていた
山脈の崩るごとくに恋破る
素晴らしい詩の瞬間は生でなし
まだ一言もいわず海へ石投げる
コスモスが私に再婚をすすめ

西宮市　末沢花美

曼珠沙華煩悩の炎をあふるごと
面子だけで生きて男は偉いんだ
孔雀のごとく　療養を楽んで
胸中のケロイドが無口にさせる
禁断を犯すこころよリンゴ食む

羽曳野市　谷一征

風はらむ帆に似た胸で生きてやる
背信を知らぬ花の色　童の眼
蝸牛　お前はいいな　家がある
日付変更線の矛盾昨日の俺が今日も居る

京都市　大久保和三郎

星の道わが人生に坂多き
善人のガラスで包む嘘ひとつ
木枯に月が裸で捨ててある
秒針がたかぶりをもつ夜をひとり

大阪市　森川すみれ

ひび割れし珠　女そのひびを撫づ
矢も楯もなくピストルの欲しい日よ
放心の時よ　吸いがらの山よ

八戸市　川村映輝

磨かれたレンズ正しく物を視る
上り凧　転落の凧　すれちがい
どん底にいて神仏に用がない

倉敷市　水粉千翁

ペン先が走って旅の子をとらえ
哭いている少女は蝶を埋めている
金のある　とんでもない日があった
多度津市　三井酔夢

美しき誤解のままで夏終る
光茫の夜汽車私をさらわぬか
明日あるを信じ夜汽車に手を振りぬ
宮崎市　野口卯之助

火葬場の灰　無花果熟しきり
ねむらせて　やると　悪魔がささやいた
たわたわと笑う悪魔に稚気もなし
鳥取市　近藤秋星

軍歌なら唄える父と娘とふたり
なるほど死んで復讐する手もあった
人生に敗者復活戦はなし
京都市　室井八九寸

演壇の真下　神経戦　あくび
視察ノートにみだれている民謡
玉島市　井上旭峯

号泣に造花の白の揺れもせず
香水の女女王蜂の如し
宿毛市　渡辺伊津志

闇深くライトに浮ぶ花の紅
つきつけるマイクへ女何故泣かぬ
仙台市　平野光道

石ころも絹布団にのりショーウィンドウ
倖せをきかせてみたい人探す
仙台市　軽部日東里

利用価値皆無無縁の人歩く
十円の硬貨十円かと蹴られ
熊本県　有働芳仙

断崖の波濤は口をあけて待ち
泥んこの血闘地下の植物群
神戸市　吉田隆史

他人なら捨てて置けない年賀状
太陽は我が家にあった父母の笑み
岡山県　永宗宗義

ウィンドは春外套の衿を立て
花の香も去りしに日溜りにて語る
倉吉市　奥谷弘朗

人垣に聖火の残した白煙
女房は皇室ファンという平和
七尾市　松高秀峰

衣かえして赤い羽根も美しく
小松市　関戸宗太郎

利用価値なし空ビンの大中小
羽咋市　三宅ろ亭

難解語多くて新聞こなし得ず
金沢市　根上杏花

持てあます夜長へ誰も来てくれず
鳥取県　清水一保

親馬鹿でよし存分に伸びて呉れ
松江市　柳楽鶴丸

青写真へ満足そうな顔でいる
名古屋市　花東千久良

税金は酒煙草でボクの誠実さ


東野大八著
風流
人間横町
B6型　二五八頁
価二五〇円
送料七〇円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランの人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。
★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

大阪市住吉区万代西五丁目二五
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪　七五〇五〇
電話大阪　(661)　六〇八一

# 高浜虚子と脇宝生

宇和川木耳

戦後の柳壇に、子規や虚子の雅号を度々見るようになった（その割合に碧梧桐の名は、あまり見かけぬようだが）。大陸柳壇の同窓、東野大八君の書いたものにも、そんなことに触れているので、不図こんなものを書いてみたくなった。

それは――、正岡さんは早く亡くなられたので、詳しいことはあまり知らないが、私は少年時代から折々、郷土の先輩としての河東さんや高浜さんには、能楽の道でよくお世話になったことがある。ある時は連吟の末座に連なったり、共に立ち方として、子方やツレ役にお使い下さったので、身近くお声に接していたことがあるからである。

もともと松山藩が採用した能楽は、シテ方は喜多流を、ワキ方は下掛宝生流（略して脇宝生）を扶持して来た。観世流は町方のものとして、公開能には参座したが――と子供心に教えられて来た。この形は廃藩置県後も、ずっと衣鉢をついで、大正初期頃まで続いた。昔の高浜家は、この脇宝生の家であったと聞く。

**春や春十五万石の城下かな**

子　規

廃藩置県後、もとの藩士の家はずい分衰微したと聞くが、幸いにも松山附近には、伊予絣という生業が出来たので、土地をうるおして、明治中期頃には、こんなほのぼのとした句が生れだしたものと思う。こうして生活が安定して来ると、徳川の親藩として、「武」よりも「文」に強かった旧藩士達の間に、発句はもとより、伝家の謡曲が流行しだしたのも、当然の理であった。

特に高浜家の如きは、親戚や知己に能楽関係の人が多く、日本の能楽界を今日の隆盛に至らしめた、斯道の大恩人池内信嘉などは、その一人である。また高浜家に伝わる謡曲本は、斯界で「高浜本」と俗称して、後年脇方の名人宝生新の校閲により、大正版として脇宝生に採用された。そして各曲目の解説を、河東さんがわざわざ筆を執られて、一々各冊の扉に書かれたものである。

**葛水に松風壑を落すなり**

虚　子

こうして子規、碧梧桐、虚子、雪月、極堂、叟柳等はもとより、折柄松山に来た夏目漱石、下村為山等までも引っ張り込んで、当時松山に在る俳人の殆ど全員、多少でも謡をうなり、然もそれが悉く脇宝生を謡ったものである。結局「俳句と脇宝生」とは、離れられない因果関係のものとなっていた。そして演能には、脇方が地方（ぢかた）の座にすわるという、脇方本意の変形の能まで催されていた。脇方の大曲羅生門や谷行などが、それであった。

このふん囲気は、後年俳句が東京に移ってからも同様であり、宗家の宝生新や池内信嘉（喜多流）、内藤鳴雪、中村不折、寒川鼠骨等が加わったため、更に油が乗った。特に漱石の力こぶの入れようは大したもので、「脇宝生を謡わざれば、夏目家に出入りすべからず」の、観を呈する程に立ち至った。


酒
清
灘・魚崎
金露酒造株式会社醸


私の存じあげる夏目家出入の方々でも、野上豊一郎、同弥生子ご夫妻、阿倍能成、小宮豊隆、岩間徹、服部嘉香等があり、久米正雄は何んの理由か、中途からおやめになられたと聞く。

かつて、印度の詩聖タゴール翁が来日した時、当時何をがなご馳走にと、官民頭をひねったあげ句、玄人（くろうと）でなく、「文人能」を催して歓待しようとなり、鎌倉の高浜さんの舞台がつかわれたことがある。その催しの主力の人々が、前述して来た人達であったことも、脇宝生に因果があった。

それは別として、私達同流の者達は、「河東さん」「高浜さん」と呼ぶ方に、親しみと尊敬をおぼえていた。名を成されたのちも俳号で呼ぶことは、何かしら歯に衣を着せた思いがした。しかし郷土の老先輩の藤野漸、池内政忠さん辺りは、秉（こう）さん――清（きよ）さんと、呼んで居られたが、これは傍で聞いていても、郷土的なやさしみと、親近感をおぼえた。

**鵜飼三年この地見ず俳風の変**

碧梧桐

それが、いつの頃だったか大分以前に、河東さんが国民派として、革新俳句を唱導されだした。紅表紙四大判のたしか「海紅」という俳誌を出された。これが碧虚分立のはじめだったと思うが、「東京では、いま両者の対立が、喧嘩状態になっている」という声が、郷土へ流れて来た。

当時俳句か、川柳に就くかに迷っていた私は、それでもこの声が気になって仕方がなかった。同門というばかりでなく、おふたりで成功された、われ等の母校（松山市立第一尋常小学校）の先輩が、何故争わねばならないのかという、頼まれもせぬ小さな心配事であった。

処がこれは、やがてその後、安堵のうちに氷解された。それは、その後松山で、田舎としては珍らしく、六流の大演能会が、三日間に亘って催された。先々代の金剛右京や、桜間金太郎（後の弓川）、梅津正保、宝生新等という、当代の名人級の巨星が集まられた。これは池内信嘉さんが、能楽会復興の成功を、郷土へ報告するための特別演能であった。河東さんも高浜さんも、この一行に参座のため、帰省されたのはもちろんだった。

開催の前々日、藤野邸で脇宝生だけの、同流の申し合わせ会が宗家宝生新先生を中心に開かれた。私は学校のひけるのを待ちかねて、小倉服のまま同邸へ走せつけた。午前中から打合わせが大分すんでいたらしく、私が挨拶をして座につくと、すぐ藤野先生が「お前すぐに立つてお見」と言われた。私には忠度と融のワキ役が決まっていた。

私はきら星のように居ならぶ、一門の先輩達の前にへきえきしたが、「学校の帰りで袴を持って居りません」というと、河東さんはすぐに立って、当時流行しだしたセルのアンドン袴を脱がれて、「これをおはき」と私に渡された。私は小倉の学生服の上から、袴の前を着けると、高浜さんはうしろへ廻られて、腰板を入れて下さった。

満座に一礼して、私が橋掛（花道）に立つと、おふたりは大小を、拍子盤で打ちはじめられた（碧梧桐は葛野流の大鼓、虚子は幸流の小鼓だった）。やがて私は脇座に居着いて、脇正面を見ると、おふたりは仲よく、ほんとうに気持よく、シテの出のアシライを打って居られた。能楽道では先輩後輩の別なく、手の空いている者は、手伝うというのが、しきたりである。

私はそれよりも、本職の芸術の上では、いかに争っていても、私人に還れば、郷土の人はやはり郷土人に帰る、ということを知った。そして「兄弟かきにせめぐも、外あなどりを防ぐ」ということを、別の意味で、身近に見た。大正三年の晩春のことだった。

# 日東里逝く

日東里（ひとり）・軽部武氏は胆のう炎から腹膜炎を併発、十一月十六日午前六時四十五分東北大医学部付属病院で死去。享年五十六歳。告別式は十八日午后一時から仙台市片平丁大町頭一の官舎で営まれた。喪主は長男、忠氏。職歴は名古屋地検次席検事、東京高検検事、宇都宮地検次席検事を経て三十一年東京高検刑事部長、福岡高検次席、松江、岐阜地検検事正から、この五月仙台地検検事正になった。氏は明治四十一年十月十八日、栃木県宇都宮に生まる。趣味は川柳以外に囲碁。川柳は学生時代から作りはじめ柳号を日東里（ひとり）と号し、独り新聞柳壇などに投句して、独り楽しんでいられたが、松江柳壇の選者で川柳不朽洞会員尼緑之助氏の推薦で、昭和三十九年九月一日に、川柳不朽洞会に入会、路郎門の人となり、その詩想を伸ばそうとされていたが病のため夭折されたことは惜しみても余りがある。十一月二十一日に大阪、大手前会館で催された大阪府市の大阪文化祭川柳大会の路郎選「食通」の題に仙台から投句、入選されていたほどの熱心さであった。

## 日東里句抄

生字引社長夫人の過去も知り
妥協せぬ心算候文で書き
禁鳥が二の膳に載る山の宿
余程暇らしく骨董屋をのぞき
貸ビルを建てて一番端に住み
移り香を気に病む仲に成り下がり
心境の変化たやすく節を曲げ
袴を脱げば存外世故にたけ
天人になり夜叉になり好きになり
書道展なのでこれをも字と思い
以下同文以上総代感謝状
大仰に欠伸している役不足
一度是非ゆっくり来やと追払い
見送りに名うてのボスの顔も見え
本性違わず生酔い蹴躓き
雨垂れの切れ目を汐に猪口を置き
肩の線崩れ妥協の声になり
本当におこりますよと念を押し
矢っ張りと思う二人に旅で合い
夫唱婦随ですわと女房舵を取り
若夫婦即かず離れず畑を打ち
役人の古手器用に猪口を受け
坐ってるだけの芸者が管を巻き
旧道へ家並頑固にしがみつき

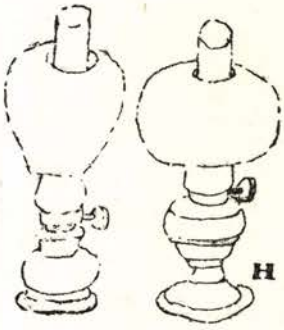
# 一路集

選者
大西八歩
八木摩天郎
小浜牧人

## 独学

大西八歩選

学士号とって独学実を結び　秀峰
度胸ある上に独学物を言い　同
独学を遺影の父に励まされ　伊久野
病む妻と子を寝せ独学灯にむかう　光道
独学で仕上げた人のエゴイズム　和三郎
独学が東大破った市長選　万竿
独学はわからぬとこで一頓挫　雅城
実力はあれど独学こねがなし　酔夢
独学で私小説から書き始め　宗太郎
名を挙げてからは独学自慢にし　春巳
独学のかげに内助の妻がいる　歌子
図書館に独学らしい顔なじみ　淀月
独学の余暇ステレオに趣味を持ち　同
独学へお茶入れて呉れる人があり　愛鳩



独学の目には紅い灯うつらない　恵二朗
独学の虫の世界を知りつくし　同
検定を取る独学に恋もなし　光郎
独学の決意日曜毎に揺れ　伊津志
消えそうな夢を独学抱いてねる　芳仙
独学で学位青春棒に振り　同
独学の勘と気合でのし上り　日東里
独学の悲しさ学歴欄空し　十九平
独学の社長学閥など問わず　同
独学の努力を額にかゝげられ　良江
独学の力が立派な仕事ぶり　不二
独学を見込まれ社長の養子口　同
独学は字引と共に疲れきり　隆子
独学の力はあれど地位はなし　同
独学の机となったリンゴ箱　宗義
独学へ今日は大きな虹が立ち　旭峰
独学に痛い参考書の送料　章雅
独学をしている無駄のないノート　卯之助
独学へほころびかけたズック靴　卯之助
独学の立志伝でも又儲け　滋雀
独学の社長に秘めた恋のきず　同
独学の座右銘社長の背にかゝり　同
独学の限界を知る孤独感　晃男
お酒が入ると独学の頃を言い　雄声
独学の社長夜学にある理解　同
独学へ故郷には老いた母があり　雄々
独学で家の貧しさ口にせず　同
独学へ意志の強さも見直され　同
独学の頃なつかしい課長補佐　鶴丸
独学のファイトに学卒歯が立たず　同
学卒に負けぬ理論を持っており　同
独学の意見煙たい大学出　代仕男
実力で来いと独学負けていず　同
独学でパスするまでの菜っ葉服　同

五客

独学で成功育英資金寄附　十九平
独学でよほど出世をする気の子　卯之助
独学へ母の晩茶が身に浸みる　千翁
寝しずまる頃に独学灯をともし　代仕男
独学がパリーで箔をつけて来る　どんたく

人

変り者と言われ独学続けてい　杏花

地

独学へ誘惑の灯の多い事　雄々

天

独学のはげみ松下さんの顔　信二

## 身持ち

八木摩天郎選

よそ目にも身持ちとわかる程になり　秀峰
胎教のみもちを母に教えられ　伊久野
過去の身持ち問わないことにして聟に　光道
もう判るやろかと夫へ尋ねて居　滋雀
わが身にも一度はあった子の身持ち　和三郎
いい嫁が来て修まった息子の身持ち　藤波
身持ちよい人でおました七回忌　信二
身持ちよい女で子供とよく遊び　吉備郎
謹厳に身を持し妻といる平和　万竿
身持ちだけ聞いて何んにも聞かず去に　たけお
宿替へ手足まといになる身持ち　初甫
落ちぶれて守る身持ちの母の意地　晃男
女難の相ありと身持ちをゆさぶられ　日東里
何不足無い社長にも子の身持ち　どんたく
母親の身持ちが縁にさし障り　良江
強意見亦かと不身持ち仏頂面　繁太郎
刑事ほど調べ身持ちをまた案じ　宗太郎
痛いとこつかれ身持ちの無表情　弥生
不身持ちを姑嫁のせいにする　春己
母の死が身持ちの悪い子を矯し　歌子
温泉に来て身ごもりを告げる猪口　八九寸
派手好きの後家で身持ちを疑われ　勝子
姓って不孝な家出の娘が帰り　光郎
呼出状初めて知った子の身持ち　李鳥
興信所あたら見合いに溝をあけ　淀月

親の子と言われぬ様に身を正し　句楽坊
好きな女娶ってからの変りよう　雄声
だるそうに箒を持っている身持ち　愛鳩
身持ちよい娘に惜しい虫がつき　芳仙
興信所身持ちを箇条書にする　恵二朗
不美人を仲人身持ちのよさでほめ　伊津志
新郎の身持ち請合う仲人口　野迷路
身持ちはよい人ではないが金を貯め　鶴丸
不良化の因は身持ちの悪いママ　十九平
カネ出来て身持ちの変る浅間しさ　雄声
義理の子の身持ちへ温い手を伸し　千翁
浮気なぞ出来る夫と見ておらず　弘朗
その昔くずした身持ちは棚に上げ　宗義
若い日の身持ちは言わず子を叱り　不二
子の身持ち気になり死ぬに死に切れず　杏花
身持ちなど捨てて生きる夜の蝶　旭峯
身持ち欄普通とだけしか書いてなし　隆子
不見転と朋輩からも鼻にされ　章雅
夫婦善敬夫の身持ちにメスを入れ　みつお
警察がついて廻っている身持ち　卯之助
親と言う欲目身持ちを信じ切り　古心

五客

良妻といわれ身持ちへさからわず　雄々
不身持ちを叱られもせず父の過去　藤波
妾しやよく泣かされましたと老夫婦　雅城
身持ち良い聖母マリヤの様な妻　保夫
外遊の留守の夫人のスキャンダル　十九平

人

女教師の恋を汚いものにする　宗太郎

地

灯に稼ぐ妻の身持ちを信じ病む　光郎

天

身持ちなどとうであろうと火の如し　代仕男

## おしやべり

### 小浜牧人選

おしやべりがついにテレビを見そこない　信二
おしやべりが来たので話題切り替える　弥生
聞き飽いた話を又もしやべり出し　八九寸
おしやべりが庭賞めながら座りこみ　日東里
さよならを言ってお喋りまだ続き　勝子
しやべつてる時のあの娘が生きている　芳仙
おしやべりも恋には重い口となり　古心
おしやべりで通り本当の友がなし　宗義
おしやべりのそばでいらいらする夫　卯之助
おしやべりが用もないのに顔を出し　清心
おしやべりへとつくにお茶が冷めている　章雅
ガム噛んでいるおしやべりの独り旅　素身郎
おしやべりへ背中の子供が足で蹴る　隆子
うつかりと喋って姉ににらまれる　杏花
お悔みに来ておしやべりの長いこと　代仕男
参観日夫婦喧嘩を子がしやべり　みつお
おしやべりも都合の悪いこと言わず　不二
おしやべりへ医師も安心して帰えり　鶴丸
隣席が逃げ出すほどによくしやべり　十九平
肝心なことはおしやべりよう言わず　愛鳩
おしやべりを義理で聞いてるとは知らず　藤波
おしやべりで肝心なこと知らされず　ろ亭
おしやべりに一と息つかす茶をすすめ　和三郎
口止めをされたとしやべり言いふらし　同
おしやべりへ夫はテレビ見たまんま　すみれ
孤独たのしむ耳にうるさい喋り様　初甫
おしやべりの中に老妓のかたい口　晃男
おしやべりを謝つてからまだしやべり　雅城
おしやべりが自分の口をふさいでる　どんたく
うすのろの亭主相手によくしやべり　光道
おしやべりの仲間を避けるデートの日　伊津志
おしやべりへつるべ落しに陽が去ぬる　恵二朗
おしやべりへ相槌やめて追いかえし　野迷路
おしやべりも内緒になつてささやかれ　光郎
お喋りがすめば急に腹が減り　雄々
お喋りがお通夜を退屈せずにすみ　同
いらいらとしてるにおしやべり放さない　季鳥
お喋りにつられ悪口少し言い　宗太郎
お話中ですがご飯が焦げてます　春己
ひからびて来てもお喋り衰えず　良江
佳里帰りたらふく喰べてよくしやべり　光郎
片言でおしやべり出来るのが嬉し　鶴丸
幸福の絶頂にいてよくしやべり　弘朗
おしやべりの話半分に聞いておき　恵二朗
おしやべりの中にも女武装する　保夫
まだしやべるらしい煙草をつけ替える　千翁
おしやべりが過ぎて肚まで見透かされ　秀峰

人

おしやべりのお惚気ばかり聞かされる　雄声

地

おしやべりが黙つて通る儲けた日　千翁

天

倖は泣いてしやべれる友があり　すみれ

軸

口止めをされおしやべりの落ち付けず


色紙短冊
書画用品
大阪戎橋筋
丹青堂
電話 ㊥㊤㊤㊤

大阪文化祭川柳賞を受賞する若本多久　氏

柳人一堂に集まる
名も改まった

# 大阪文化祭

## 第十六回 川柳大会

主催　大阪府・大阪府教委
　　大阪市・大阪市教委

会場
於・大手前会館

大阪市民文化祭の川柳大会は昨秋から府市から一つになって開催することになったが、第十五回の川柳大会は表面はともかく、府市協調の準備が充分でなかったので、事実は従来通り大阪市・大阪市教委・関西短詩文学連盟の主催川柳雑誌社・川柳文学社によって華々しく開催されたが、本年の大阪市民文化祭は大阪府・大阪府教委・大阪市・大阪市教委の主催となり、名も大阪文化祭川柳大会と改め、府市の実行委員により第十六回の川柳大会を継承挙行されることになった。従って、今回は大阪に発行されている番傘川柳社、川柳文学社、せんば川柳社、川柳雑誌社の四社が参加し、大会に於ける運営を川柳文学社及び川柳雑誌社が担当した。

○

大会は十一月二十一日（土）午后一時から、大手前会館三階大広間で幕をあけた。司会は西尾栞氏。若本多久志氏の開会の辞、続いて演劇評論家大西利夫氏の講演「初代鴈治郎の話」を聴く。頻かむりの中に日本一の顔（水府）のモデルであった名優鴈治郎丈の常に新しい工夫を芸に加える芸熱心さ、後進に対する指導の真摯さなどを語られた。例えば鴈治郎が、しばしば台詞に忠実でないので、脚本家から、演出家に脚本通りの台詞を言うように仕向けろと抗議が来るのだが、台詞の一字一句には忠実ではないが、芝居の推移をよく心得、台詞そのものの気分をしっかり把握しての気儘な逸脱なので、演出家も注意は遂に言い出すことが出来なかった話。当時子役をしていた現在の鴈治郎（二代目）が、どうしても初代鴈治郎の思いに適う芝居が出来ないので、大声で泣く程の折檻をし、明日はうまくやれよと言って聞かしたのが、ラクの日であったという話、浪花名優の逸話、哀話をふんだんにとり入れて満場を感銘に酔わせられた。

講演が終わって、金泉万楽氏の席題「邊才」から披講がはじまり、参会の柳人達の緊張となった。次いで、北川春巣氏の席題「宝石」の披講があった。

席題二題の披講が終わって、兼題に移り、劈頭に麻生路郎本誌主幹が登壇、「盛会をおよろこび申し上げます」と述べられ、直ちに兼題「食通」の披講に入られ、最后に、若本多久志氏の入賞句「勿体ない喰べ方をして通という」を高らかに発表された。多久志氏は万雷の拍手の中で、大阪府知事、大阪市長、大阪府教育委員長、大阪市教育委員長連署の賞状ならびに賞品を受けられ、句会の雰囲気は最高潮に達した。次いで、岡楠宣介氏が兼題「淀屋橋」、岸本水府氏が兼題「嫉妬」を、最後に堀口塊人氏が兼題「緑」を披講され、それぞれの入賞句に、賞状ならびに賞品が贈られた。名吟佳句に酔うた満堂の柳人達、入賞者、入選者の昂奮はなかなかおさまるべくもなかったが、掉尾をかざるジェンジー中村氏の清興「鳩魔術」の素晴らしい演技に魅せられた。かくて夕闇せまる頃竹岡頓坊氏の閉会の言葉となった。

○

兼、席題の入賞句及入賞者名は左の通り。

**入賞句**

麻生路郎氏選
兼題「食通」
勿体ない喰べ方をして通という
　西宮市津門西口町五〇
　若本多久志

岡崎宣介氏選
兼題「淀屋橋」
陳情とデモすれ違う淀屋橋
　大阪市東住吉区桑津町
　五ノ一六八
　本庄金三

岸本水府氏選
兼題「嫉妬」
顔色に出さず日記に書く嫉妬
　高槻市富田町総持寺団
　地一六の三〇五
　宮島仁三郎

堀口塊人氏選
兼題「緑」
冨士晴れて祖国の緑つつがなし
　大阪市東区淡路町三ノ一五
　山下清緑

金泉万楽氏選
席題「漫才」
漫才にも腹芸というマをもたせ
　大阪市東淀川区木川西
　二ノ七七
　古下俊作

北川春巣氏選
席題「宝石」
心安らかに宝石磨く職
　大阪府河内市三島三三九
　（住安荘）内
　斎藤清幸

**バックナンバー**

本誌のバックナンバーの株が天井知らずに上がっていますが、趣味的に製本される人達のために出来るだけサービスしますからこの機を逸せず在庫の有無を往復ハガキでお問い合わせ願います。

第百六十五回

# 大萬川柳

兼題「つけ落ち」入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数　三百八十六句
入選　四十句

神戸　隆史
おあいそもさよならもしてつけ落ちし

篠山　可住
つけ落ちへ蛍光灯がまだ消えず

堺　慶之助
会葬の受付自分をつけ落とし

羽曳野　圭太
つけ落ちで焼香だけの人にされ

岡山　七面山
つけ落ちにしとけと情夫目で知らせ

山口　弘道
前月のつけ落ち損した気で払い

大阪　琴女
つけ落ちを呼びとめられた縄のれん

富田林　美房
つけ落ちの一つもあってほしいパー

大阪　痴亭
つけ落ちにしてもらいたいえんま帖

和歌山　木魚
神様につけ落ちがありまだ嫁かず

大阪　庸佑
つけ落ちのないがめつさを笑っとり

奥　甦光
つけ増しはするがつけ落ちせぬマダム

京都　八九丁
つけ落ちの諍解をとる長火鉢

岡山　十九平
ホステスの恋Kさんをつけ落とし

大阪　保夫
つけ落ちへ幹事慌てて追加する

羽曳野　静波
ゼロ一つつけ落としてたウインドー

大阪　章雅
ホヤホヤのアツアツつけ落ち無理もない

高槻　静馬
つけ落ちに釣りまで余分に渡してた

笠岡　遠二
つけ落ちを言うて払うて恩にきせ

大阪　晃
つけ落ちのやっと半分だけもらい

倉敷　方大
つけ落ちで仲居の恋が見破られ

児島　恵二朗
つけ落ちの常習パパはお人よし

大阪　梅里
つけ落ちにされて面子を楯にとり

加賀　光郎
デートする日の伝票はつけ落とし
やるせない不満名簿にのって居ず

西宮　多久志
儲かったつもりが翌月まわして来
つけ落ちを言うてやったがまけもせず

大阪　春巣
売らん方がええとつけ落ち叱られる
つけ落ちもつけ増しもする女将にて

大阪　良
つけ落ちやないかと剛染ありがたく
つけ落ちで通らないほど穴があき
つけ落ちの寄附から町政あばかれる

五客

岡山　七面山
愛してる人へつけ落ち多くなり

石川　雅城
うかつにも知事の香奠つけ落とし

岡山　藤波
チップまで貰ってつけ落ちとも言えず

米子　雄々
つけ落ちの店をしばらく遠ざかり

大阪　梅里
つけ落ちがあってもこたえんほどはやり

（人）

富田林　美房
つけ落ちを客に教そわるほどはやり

（地）

大阪　小松園
つけ落ちは養子のせいにしてしまい

（天）

笠岡　桃里
一とねむりしてつけ落ちを思い出し

## 大萬川柳ベストテン（十一月現在）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一 | 梅里 | 二二、〇 | 大阪 |
| 二 | 小松園 | 一七、五 | 大阪 |
| 三 | 静馬 | 一七、〇 | 高槻 |
| 四 | 晃 | 一五、五 | 大阪 |
| 五 | 桃里 | 一五、五 | 笠岡 |
| 六 | きさ子 | 一五、五 | 岸和田 |
| 七 | 好郎 | 一三、〇 | 泉北 |
| 八 | 宗太郎 | 一三、〇 | 石川 |
| 九 | 柳志 | 一二、五 | 大阪 |
| 一〇 | 美房 | 一一、〇 | 富田林 |
| 一一 | 方大 | 一〇、五 | 倉敷 |
| 一二 | 春巣 | 九、五 | 大阪 |
| 一三 | 章雅 | 九、五 | 大阪 |
| 一四 | 木魚 | 九、五 | 和歌山 |
| 一五 | 多久志 | 九、〇 | 西宮 |
| 一六 | 清人 | 九、〇 | 大阪 |
| 一七 | 圭太 | 九、〇 | 羽曳野 |
| 一八 | 遠二 | 八、五 | 笠岡 |
| 一九 | 静波 | 八、五 | 羽曳野 |
| 二〇 | 阿茶 | 八、〇 | 大阪 |

以下略

次の兼題「荷かざり」五句以内
〆切　十二月十日
発表　十二月二十日

一月の予告「素うどん」
〆切　一月十日
発表　一月二十日

投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ十　大萬川柳会

## 大萬川柳会々則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その覇を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るを以て目的とします。

二、毎月の出題並びに選句は川柳雑誌社主幹麻生路郎先生にお願いして居ります。

三、投句はすべて一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附して選句をして頂きますから絶対公平であります。

▽毎月十日締切二十日に発表。出題及び入選の発表は毎号の川柳雑誌に掲載されます。

四、左記の採点法により月々の得点を加算して順位を定め毎月ベストテンを発表します。

▽天の句四点、地の句三点、人の句二点、佳吟一、五点、平抜き一点。

五、毎年三月より翌年二月までを一年度として年度間の綜合得点の成績により順位を定め年度ベストテン把持者に賞状並びに賞品を贈り大会の選者に推薦し祝賀宴に招待します。同点の場合は前年度優位によって定めます。

六、大会は毎年三月に行ないます。

七、会費は不用、但し大会の会費は百円投句料五十円。

八、投句その他の連絡先は大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇大萬川柳会宛に願います。

昭和三十九年十二月　大萬川柳会

# 柳界展望

南紀川柳行一座つて左から。
薫風子・すすむ・舟遊・久美子・夢紅の諸氏
（瀞にて）

## 句会

▼本社忘年句会は十二月六日（日）午後一時から千日前電停東入ル自安寺で開催される。句会に引き続いて恒例の懇親宴が催されるので柳友多数お誘い合わせの上ご出席をお願いする▼七面短詩型文学クラブ川柳部句会は十一月四日（水）午後五時から北新地の朝千鳥で開催。▼南海電鉄川柳会（大阪市）十一月例会は十九日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳句会（大阪市）は十一月二十七日（金）午後六時からコクヨ株式会社会議室で開催。▼大阪逓信病院川柳会十一月句会は二十八日（土）午後二時から同病院北館五階会議室で開催。▼川雑岡山支部十一月例会は国鉄倉敷地区文化部川柳句会を兼ねて十四日（土）倉敷職員集合所で開催。▼川雑大鉄支部（大阪市）十一月句会は一日（日）京都高雄へ吟行。▼大阪文化祭第十六回川柳大会は昭和三十九年十一月二十一日（土）午後二時から大手前会館三階大広間で開催。▼故丹羽のぼる七周忌追善句会は十月二十五日唯念寺で開催。▼どんぐり川柳会（羽曳野市）OB発足句会は十月二十五日（日）午後一時から阿倍野区松崎町三ノ一割烹大萬で開催、二十七名出席再会を喜び合った。▼第十回熊日川柳大会（熊本市）は十一月二十二日（日）午前十時から熊日別館ホールで開催。▼第十三回八代文化祭川柳大会（八代市）は十一月十五日（日）午前十時から八代市厚生会館で開催。▼函館市文化祭協賛市民川柳大会は十一月十五日（日）午後一時から鶴岡町鶴友会館で開催。▼北村白眼子。長谷川紅露古稀祝賀大会の特集が「はこだて」十一月号として函館川柳社から発行された。▼第十二回新津市民川柳大会は十一月十五日（日）正午から新津市本町四新潟信用組合ホールで開催。▼従来の「中部日本川柳作家協会（名古屋市）」が発展解消して、新たに「愛知川柳作家協会」が発足した。地区範囲の莫然としていたのが是正されたのを機に、種々と発展的行事を催されることになる由。▼須坂公民館川柳句会（須坂市）は十月二十五日（日）第百回記念句会を市公会堂で開催。

## 消息

▼戸田古方氏（豊中市）は大谷中、高等学校から刊行されている「叢」に「図解—ある視覚教育について」を執筆し、教育に携って、趣味として川柳、シナリオ、絵をやったことがムダでなかったことを発表された。▼路郎主幹は十一月十二日（木）には摩天郎、八郎の両氏、メ女さん宏子さんらを伴ない道頓堀朝日座の文楽十一月公演の「恩讐の彼方に」を観に出かけられた。主幹はこどもの時分から文楽に親しまれたそうだ。▼河野春三氏（東京都）は「馬」五号を発行後、十一月十四日（土）午前十時新大阪駅発の「ひかり」号で、生活再建のため単身上京、薫風子が雨中の出発をお見送りした。▼米沢暁明氏（大洲市）は十一月二十一日（土）の午后に上阪するので、時間があれば大阪文化祭の川柳大会に出席したいとの来信があったが、伊丹から東京へのコースをとられたらしく、遂に姿が見えなかった。▼田垣方大氏（倉敷市）は十一月四日から十二日まで上京、相変わらずの人と車に閉口されたが十月上京して聖火とぶつかった時と較べると何か落着いた感じでしたと。▼築山快夢起氏（ホノルル市）は布哇経済研究クラブの主筆をしておら

富田林市文化祭川柳会——（前列左から）吉太郎・花柏・すみれ・木美・摩天郎・美代（二列）清子・白柳・六竜子・静林庵・八郎・貴山・栄一郎（三列）美羽・一義・雷史（四列）きはち・ひろむ・日出男の諸氏　（杉山邸にて十一月八日）

お買物の楽しさを贈る
そごうの
商品券
東京　大阪　神戸　各店共通
10000円まで
そごう

れるが、「経済研究」紙に路郎主幹の「一握りあゝ人生は和にしかず」の句を引用、「人生和にしかず」と題して評論を執筆された。▼井上圭太氏（羽曳野市）はどんぐり川柳会も秋の退院シーズンで約半数が入れ替わったが、新入会員も増え作句にいそしんでおられる由。▼月原宵明氏（今治市）は十一月十五日業界の有志と黒部ダム、高崎方面へ研修旅行をされたが、帰途来阪の余裕なく路郎主幹にお会い出来ず誠に残念であると。▼佐野ト占氏（八代市）は路郎主幹が熊本へ行かれた際、熊本まで出迎えられたが、十九日熊本へ出ましたので田中先生をお見舞いしたところ、大変お元気で、八代の文化祭には出かけるよとのことに驚いたりよろこんだりしています。路郎先生のお見舞いが大変効果があったようです。私は十二月の初めに沖縄へ行き一月には大和へ帰って来ようかと家内と話しております。その節は是非ともお邪魔をしたいと路郎主幹へおたよりがあった。▼中村九呂平氏（下関市）は初夏の頃から健康を害され十一月八日の例会に出来なかったが故市多楼さんの意志をついで最後の一人になっても川柳を続けるとのこと、一日も早く健康を取り戻されるようお祈りする。▼越智一水氏（今治市）は十一月三日岡山に於ける第六回全国郵政川柳大会に出席された。「秋だ秋だここもやってる菊花展」▼高野不二氏（新潟県）から、「路郎先生、佐渡旅行は是非夢ではなく実現して下さい。新潟から飛行機なら二十分です。是非是非お待ちしております。」▼水谷竹荘氏（大阪市）は別項記載の通り、市場没食子氏の令息に親戚の娘の結婚の仲人をつとめられたので、没食子と竹荘は柳友の上に、「今日からは親類という顔になり」とその喜びを寄せられた。

**句集・柳書**

▼片柳哲郎著、句集「黒塚」が昭和三十九年十一月一日、静岡市豊原町五五番地川柳鷹発行所から限定百五十部刊行された。著者二十年の作品三百八十七句の集大成を、川上三太郎氏はその序に、「彼の句を見て感じる事は、行儀の好いという事と屹然と句の宿命であるかに見える十七音律を駆っている事である。叫ぶかに見えるがそれは悲吟でもなく怒号でもない。高音ではあるが雑音がない。もう一息でそれは清澄にまで達する声色である。」と述べておられる。「鴉ある夜紳士となりぬ一歩二歩」「眼鏡はずして死んだ真似せる」B6版百七頁、頒価二百円。▼上野鈍突編著「川柳史観」が一九六四年九月二十日発行された。米国シャトルに住む著者が、川柳の文献の少なきを嘆きつつ、柳書や新聞の切り抜き、柳誌などから書き写したものを一纏めにして、在米川柳愛好家の参考になりはせぬかと一冊子に上梓されたもので、川柳の起源、万句合・川柳時代年表・俳諧「武玉川」・俳風「柳樽」に就いて・「柳樽拾遺」について・「川傍柳」・明治川柳発達史・アメリカ川柳の発祥・の各項目から成る。B6版二百十四頁、非売品。東京からの出版で、高須啞三味氏が校正その他の労をとられた由。

**慶　弔**

▼西尾葉氏（八尾市）の三女蕉子さんは、株式会社大丸取締役田中誠二氏夫婦の媒酌により古今堂毅氏との婚約整い、十一月三日午後二時三十分新阪急ホテルで華燭の典を挙げられた。路郎主幹は新婦側を代表して祝辞を述べられた。戦後路郎先生の寿像の除幕式の際、除幕のヒモを引いた少女の蕉子さんだったのも奇しき因縁と云えよう。▼市場没食子（大阪市）の長男久不氏は水谷竹荘氏夫妻の媒酌で、竹荘氏の従兄弟の長女野々村紀子さんと結婚、十月二十六日大阪都ホテルで華燭の典を挙げられた。▼橘高蕉風子（大阪市）は十月二十六日待望の長男出生、充と命名した。▼軽部日東里氏（川柳不朽洞会員）が十一月十六日に、胆のう炎と腹膜炎併発で仙台東北大病院で死去された。謹んで悼む。

**移　転**

▼黒川紫香氏（宝塚市）は十月三十日宝塚市川面鍋ノ裏九ノ六へ転居。

**電話番号の変更**

▼中村祐吉氏（大阪市）勤務の大阪府立図書館の電話番号が、代表取り扱いとなり左記のとおり変更になった。

電話大阪（二〇三）〇四七四番
（代表）〇四七五番〇四七六番

**正　誤**

▼前号八頁下段最終行の態を熊に、九頁上段一行目の鳥を烏に、それぞれ訂正。又、同四行目の前書は抹殺のこと。（薫）

## 不朽洞会から

★新会員紹介——十一月
▼宮川珠笑（枚方市）正
——白柳氏推薦（多）

## 不朽洞の人々

鳥取市議会議員・会社員の河村石太郎氏

### 名誉税生活へどっとのしかかり

（日　満）

「団結の力に頼る議員章」の身に、労組をはなれての行動はない。ましてあと二年もすれば、又選挙があり労組の力を借らねばならぬ。そこで労組との縁がきれないようにと、顧問という肩書をもらっての存在は、勿論会社では平社員。しかし会派の会長とあっては世の寄附族に探し出されてはゆすられている。名誉税だと半ばあきらめてはいるが、この名誉税、案外馬鹿にならずわが生活をおびやかすことしきりだ。

# 花地抽壇

いのちある句を創れ

**投稿規定** ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

## 本社 川柳文化の夕（大阪市）

11月6日 午后6時
**会場 ― 千日前 自安寺**

十一月句会「文化の夕」が六日（金）午後六時から千日前の自安寺で開催された。

路郎師の柳話は文化の意義を述べられ、昭和二十八年、川柳生活五十年記念に発行された句集「旅人」を携行、句集発行の意義や苦心について語られ、諸君の一人一人が句集を遺すよう精進されたいと句集刊行をすすめられた。

本夕の不朽洞杯は兼題「けだもの」の天の句によって、清水白柳氏が受賞された。九時散会

（八）

出席者――路郎、野菜、水客、圭井堂、柳志、柳宏子、白溪子、たつみ、いさむ、珠笑、滋雀、専翁、すみれ、文秋、一舟、泉睦、白柳、舟遊、〆女、多久志、薫風子、あいき、みさ子、静馬、八郎、吉備郎、小松園、すすむ、清人、恒明、金三、トメ子、句楽坊、有子、梅里、天樹、庸祐、霞乃、

**兼題「白菊」 若本多久志選**

白菊の歌へ涙の明治者 野迷路
愛の詩か墓標を埋める白い菊 章雅
白菊を見つめて女自供する 真砂
情憎し白菊ばかり活けてある 章雅
白菊を妻の座にする床を持ち 天樹
人間の息を白菊汚ながり 小松園
白菊を床に霜夜の湯がたぎり 梅里
売家に白菊だけが咲いてゐる トメ子
白菊を一輪さして少女病み 柳宏子
禅寺の朝を白菊だけの床 小松園
表彰へ白菊つけた妻を連れ 泉睦
白菊を活けて客間へ目出たい荷 白溪子
白菊を愛しつづけてミス通し 一舟
菊花展その白菊は君に似て どんたく
ままごとの御馳走になる白い菊 〆女
除虫菊蚊取になるとも知らず咲き 滋雀
金婚のふたりの胸に白い菊 専翁
白菊の気品買われて囲われる 静馬
枕辺は遺言通り白い菊 圭井堂
白菊の君とおだててプロポーズ あいき
白菊になれとは云わぬ親の欲 圭井堂
菊花展白は貴遊のように咲き 文秋
振り向けば菊の白さときそう人 水客
白菊が運転台で無事な揺れ 滋雀
目正月のあと白菊を酢のものに 八九寸
喀血を知らず白菊咲くベット 珠笑
聖者おわす庵の圏に白い菊 句楽坊
菊白し長屋に惜しい人が住み 薫風子
白菊が牛乳ビンで咲く飯場 珠笑
○夫人逝く
白菊にかこまれて行く遠い旅 どんたく
刑務所の庭白菊が目に泌みる 多久志

**兼題「真珠」 正本水客選**

歌手の首大粒真珠ぶら下り 喜仙
模造真珠とは知る人もなきお人柄 花梢
太刀魚の色にもどった首かざり 真砂
交換の千円銀貨真珠光 三時
胸の真珠女に夢があるかぎり 花梢
一粒の真珠で妻へ感謝する すみれ
志摩の旅真珠の筏にたそがれる 舟遊
趣味悪いネクタイ真珠ぎらっかせ 珠笑
ペンダントの真珠で過去を見破られ 柳志
大粒の真珠に母をしのぶ艶 多久志
ネックレス養殖真珠で満足し 阿茶
貫祿を真珠はにぶい色に見せ 文秋
太陽の温みにそむく日の真珠 天樹
あこや貝真珠になるまでいたわられ 静馬
真珠つけ春の中卒もう女 滋雀
ビロードの黒に真珠よくうつり 静馬
志摩で売るコケシ模造の真珠なり 白溪子
一泊の志摩妻へ真珠を買うて去に いさむ
貧乏をしてたら真珠もうたぐられ 一舟
目が肥えて一個も持たぬパール嬢 圭井堂
薦め上手真珠は母娘行けますと 章雅
持つべきに持たれ真珠の味を出し 宗義
真珠貝から出して買うたと書き添へて あいき
幸せは真珠の似合う首ならず 水客

**兼題「へんくつ」 金井文秋選**

へんくつの店へんくつの客が来る 花梢
黒枠となってへんくつ慕われる 八九寸
家裁でも彼のへんくつ持てあまし 光道
値切つたらへんくつ買わんとおきなはれ 摩天郎
へんくつが消えて見舞いを案じさせ 珠笑
一徹をまげないとこが気に入られ 梅里
セールスのネバリへんくつの勘にふれ 清人
へんくつとうまを合せて酔いきれず 泉睦
来賓席へんくつ同志竝ばされ 静馬
へんくつもひとりにされて寝てしまい 梅里
へんくつを妻経験で操縦し 句楽坊
正直につとめへんくつ者にされ 珠笑
金になる日はへんくつも愛想よし 小松園
へんくつで通し貧乏省みず 金三
へんくつの見本にされて恥じていず 一舟
へんくつが飯ってやっと座がなごみ すみれ
へんくつで通りまともな道をゆき 柳宏子
出すものは出してへんくつ見直され 柳志
へんくつになって孤独と対決し たつみ
へんくつが募金に腹の太さみせ 〆女
へんくつの留守をねらって来た無心 いさむ
へんくつなバイヤーに女という決め手 清人
勲章を貰うてへんくつ見直され 静馬
へんくつの社長も二号いるそうな すみれ
へんくつへまだお人好し食下がり いさむ
へんくつが邪魔して礼が云へぬ口 野菜
弁のたつへんくつだから逆らわず 白溪子
へんくつでよし飯場では押しが利き 同
ハラハラとさせてへんくつ仲がよし 章雅
へんくつでひとり十年炭を焼く 野菜
へんくつの方でも無形文化財 文秋

**兼題「けだもの」 橘高薫風子選**

都会ジャングルけだものの銃が火をふいた 舟遊
飼ひなれた中にも野性ちらと出る 柳宏子
見世物になるけだものの鉄の檻 金三
剝製のけだものの無気味な目でにらみ 白溪子
けだものの美しき眼に見つめられ どんたく
けだものになって妻子の席を取り 珠笑
飲むほどに酔ふほどにけだものになり あいき
けだものと思いもよらず飲むまでは 八郎
思うがままに一匹狼として生きる 柳宏子
獣心をつつむ背広に陽が上る すすむ
美しきけだものガウン横になり 同
けだものに許す気になる夫病み 野菜
けだものの方が心から真正直 野迷路

聖者にもけものにもなれず世を終る　野迷路
獣心を秘めてしでもおごろうか　静馬
けだものにも劣ると罵倒されて生き　多久志
けだものの昼間はアパートでごろ寝　清人
けだものの様な爪してミス応募　同
けだものも住に追はれてくる文化　金三
けだものの体重となり朝が来る　水客
餌をやればけだもの同志敵になり　摩天郎
塞へ腰かけてアベックけものめく　白柳
足並みの正しさ名馬けものでなし　薫風子

**席題「奇術」　清水白柳選**

騙されるたのしさ恋人と奇術見る　薫風子
雨乞ひに奇術用ひた例きかず　八郎
奇術でも使うて見度し織女難　同
数祖さま奇術師に似たことを云う　薫風子
とっときの奇術を先きにしてやられ　梅里
なんぼでも卵の出る袋ほしがる子　野菜
かくし芸音痴奇術を習い出し　梅里
素人に出来る奇術は種を見せ　文秋
奇術師の両手に鳩の白が浮く　水客
あいている手が曲者である奇術　舟遊
奇術師と対座そわそわして別れ　珠笑
課長殿奇術をやればよいおやじ　トメ子
何を売る香具師か手品もやって見せ　柳志
かくし芸トップで奇術をやる自信　清人
摑まれた鳩は奇術と思うてず　白溪子
病みつきになって奇術の前座に出　恒明
子の手品三べんやれば種が見え　文秋
華やかな奇術の裏に過去をすて　泉睦
奇術では寝てストップで目を覚まし　同
習いたての奇術へ妻も子も苦笑　舟遊
千円貨奇術に委すいい度胸　天樹

**席題「猫ババ」　松江梅里選**

猫ババてすまぬ政治の茶番劇　すすむ
猫ババの心算でなかった借りた率　八郎
猫ババをされた事から熱がさめ　みさ子
猫ババは出来ぬラッシュの拾ひ物　文秋
中味を見てから猫ババするつもり　柳志
猫ババもとがめられない程に惚れ　多久志
猫ババをした分だけは皆使い　金三
猫ババかこんなところにあった本　天樹
猫ばばに臆病風が吹きはじめ　トメ子
猫ばばをされても腹の立たぬ人　〆女
釣銭は初手から渡さぬものと決め　小松園
猫ばばを決めて女と旅に出る　清人
猫ばばをして会計の如才なし　たつみ
五年程経って猫ばばした話　多久志
役得でした猫ばば大目に見　たつみ
鏡台の金は猫ばば決めておき　清人
猫ばばへ山分けさせる口を出し　白溪子
うしろ楯あるから猫ばばする積り　いさむ
交番が遠く猫ばばしてしまい　白柳
猫ババをされ香典やとおもとりま　恒明
猫ばばの気もなく暮がきてしまい　水客
猫ばばの頭を撫でて吐き出させ　梅里

**席題「ハンサム」　辻白溪子選**

ハンサムと云うだけとんと働かず　恒明
ハンサムでないので美人を妻に選り　珠笑
ハンサムの噂を女聞きたがり　泉睦
ハンサムな上にサングラスが似合い　珠笑
ハンサムな彼氏でうれしい気がもめる　多久志
ハンサムに育つ息子へ気を使い　あいき
ハンサムな男女のあとから出　金三
ハンサムなばかりに色で身を崩し　文秋
ハンサムに惚れて苦労のたえまなし　梅里
ハンサムを意識しすぎてよりにより　吉備郎
ハンサムなだけでは女ついて来す　文秋
ハンサムでなかった倖せうちの人　八郎
ハンサムな人やと故郷から婿縁談はなし　滋雀
ハンサムが来てスタドンの巾をとり　たつみ
ハンサムで金持仲々見当らず　静馬
白粉を落し美男で居る楽屋　柳志
パーチンのハンサムに阿呆らしいチップ　白柳
ハンサムでないので女難占われうらな　珠笑
オールドミスだけにハンサム持てている　静馬
動め又替えてハンサム夜が好き　清人
不愛想もハンサムだから気にならず　たつみ
B氏のおしゃべりハンサムこきおらし　柳宏子
ハンサムな客へ売子が寄って行き　金三
へちゃ連れて居るからハンサムにみえるだけ　小松園
替え唄が出てハンサムが見直され　白柳
ハンサムにされて結局払わされ　柳宏子
ハンサムの兄とあるいてひやかされ　圭井堂
ハンサムを意識しているタバコの輪　柳宏子
ハンサムな男の胸の金メタル　水客
ハンサムへ訊かいでもいい道を訊き　多久志
ハンサムに惚れてきっちりよろめかれ　梅里
ハンサムを坊やと呼んで可愛いがり　白溪子

雑川　**京都支部句会**（京都市）　田中鳥雀報

美しい後家さんの理髪店が小さい駅前　ゆきら
寡婦帰る途にホテルの窓がある　礫
投書それだけの事で朝のパンを焼く　極堂
一主婦で女の自我を投書する　真砂
芸術でない眼を彫刻え向ける　半月
島は夕焼海賊灰皿をほる　枯粒
並びて魚腹商い遠き西斜陽　司郎
白魚の腹に何にもない清らか　鳥雀

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）　金井文秋報

やりくりをいの一番に母見抜き　恒明
持ちまわる招待券は今日かぎり　梅里
やりくりの跡が見えすぎ受取れず　一舟
だし抜けに慣れて世界も驚かず　小松園
やりくりをしたなと思う粗品が来　柳宏子
目が開くと世界の何処かで小競合い　金三
やりくりで夫に言えぬ借りも出来　文秋
ゴールイン男に見せる顔でなし　柳志
国旗出しときやと登校あと戻り　市郎
有難迷惑夫婦同伴招待状　章雅
不参加の数で幹事の胸いたみ　双楽
メーデーに参加不縁の因にされ　圭井堂
散らかした中へ招待客が来る　白柳
やりくりを貧乏神に教えられ　順三
巻尺がうれしく延びる世界新　好郎
招待席水と油が並ばされ　静馬
又揚る米旗へメロディ児も覚え　滋雀
招待状故郷の母から書きはじめ　弥生
スポーツで鍛えた足へハイヒール　凡子
やりくりの腕を買われて専務付　痴亭
人生のやりくりっかず世にも厭き　専翁
御招待されて二次会催促し　正治

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社　大阪市北区源蔵町5（361）9373代

支局　東京都千代田区神田鍛冶町2（252）4941代

名古屋市昭和区村田町2（88）9069

日の丸が画になる山の一軒家　阿茶
割勘と聞いて参加をやめにする　雄峰
スポーツでもせいとお医者に勧められ　宗義

川雑　**玉造支部句会**（大阪市）

西出一栄報

誰に何頼んだやらも取りまぎれ　柳宏子
猫よりはマシだと畑へ追いやられ　志津子
君が代を夢中で聞いた金メダル　文秋
背のびして聖火の煙にむせ返り　眉水
駅出来て村の長者の順変り　静馬
糸のような滝も村では名所なり　三時
車井戸軌ませ村は秋を汲み　六竜子
団地族村の空気を変えに来た　清子
つながれて犬は一日土を掘り　柳志
三輪車つないで子供の超特急　宇佐夫
筆まめなレターがつなぐ愛確か　痴亭
つながれて小犬に不服菊日和　眉水
間をつなぐアドリブ流石に芸が枯れ　章雅
愛のリレー命をつなぐ血が届き　義介
土壇場に来れば憎めぬ血のつぎ　一舟
鉄骨の火花散らしてつながれる　一栄
信用をされて前科が切り出せず　凡子
信用の椅子にもあった使いこみ　金蔵
予報雨不信の顔で傘を持ち　正彦
残業と思いこんでる妻の針市郎

川雑　**ハワイ支部句会**（ハワイ）

築山快夢起報

ミシン踏む女房貯金へ夜を更し　三石
無い筈の男が派手に飲みあるき　雪女
臍くりも貯金と云えば幅がきき　平八郎
子の貯金内証で借りてすましとき　紅茶
夫死んでからが貯金も出来始め　カロ女
後入りはハズに内緒の金を貯め　あき坊
頭数だけは揃えた貯金帳　紅溪
子の月給貯金してやる親心　同
救はれた貯金へ妻は見直され　泉水
腹の子に貯金してやる親心　柳童風流
長病らい貯めたお金は医者が取り　快夢起
家計簿へ妻の貯金はつけてなし　魔花麗
故郷の山を貯金が見せてくれ　斧平
虎の子の貯金中風に寝て食はれ　同
出してよし貯めて尚よし貯金箱　拝山
仏壇を買う気の貯金まに合はず　同
念願の貯金は成らず異土に老い　柳葉
貯金帳夢はハワイの空に飛び　万里歩
貯めもせずモロハもせずに老いて行き　人生
袖の下貯めて特権鼻にかけ　内海
借金の激しさ貯金帳反古にされ　暁舟
守銭奴と云はれ貯金死んで行き　美舟

○

ピクニックプチも家族で連れて行き　暁舟
大家族国際色に成っている　紅溪
遠慮なく洗うて貰う家族風呂　紅茶
時代なり家族へ黒の血も交り　万里歩
スリッパ二足並んだ家族風呂　同
倖は新仏なきわが家族　浅太
家族制度折目正しい明治調　峯円
子を持たぬ寡婦には猫も準家族　柳葉
同郷の野遊賑う家族づれ　あき坊
家族からわかれず三男が一家持ち　平八郎
借家探し十人家内で断はられ　魔花麗
孫や嫁訛りとりどり家族会　美舟
家族風呂別々に入る老夫婦　斧平
罪なこと他人と入る家族風呂　河童風流
婿が来て家族にヒビが入りそめ　三石
裸ん坊ずらり並んだ家族風呂　快夢起
古くとも家族制度を恋しがり　泉水
大家族食卓いつも目白押し　カロ女
保護家族だのにパーマの映画のと　同
家族づれ落ちりや諸共空の旅　拝山
家族主義捨てた親子に溝が出来　内海

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）

野村味平報

無駄使いするなと千円銀貨貰い　味平
子の智恵はいつもつまらぬものを買い　雅城
外で呑めば妻はチップがいるときめ　酔羊
湯の宿の情もやっぱり金だった　久雄
人情の裏も見倦いた聴診器　光郎

川雑　**木次支部句会**（島根県）

藤井明朗報

街角に来て思い切り打明ける　清泉
未亡人今日はハッスル体育会　明朗
もう一度振りかへってみる街の角　かよ子
たくましい肌競い合う金メダル　芳子
新妻のやいときれいな肌に傷　正夫
あの肌が僕の一生狂わせた　侑正
化粧水じんと泌みいる肌の荒れ　孝華
肌荒れを鏡に向って話す妻　勇
魔法瓶一人待ってる共稼ぎ　昌
代々の浮沈を知って石は生き　清夢
魔法瓶酒がお供をしてる旅　祥月
ご神体石にてもよし有難し　冬樹
つまづいた小石一気にけり飛ばし　芳子
石地蔵ライトに浮かぶ曲り角　明朗
肌の色たくましく競うオリンピック　清嵐子

川雑　**備前支部句会**（岡山県）

横山一声報

人間の知恵タコ壺に見っけたり　正洲
骨壺の忘れ物とは恐れ入り　宗義
壺よりも花をほめたが気に入らず　静子
おっとっと孫より壺を大事がり　譲士
わからない所が壺のよいところ　卓久
快適なねぐらたこ壺とは知らず　柳風子
壺焼のいもが買いたいハイヒール　芳月
古備前の壺が険しい座をまるめ　斧九郎
庭先の壺で我家の年を知り　君子
ゆかしさを秘めて茶壺に静を持ち　浄美
沈然の壺に主人を思う秋　始ん坊
割れた壺接着剤でつないで見　水仙
壺一つ思うに任せぬ土ひねり　計
たこ壺も出て花会の新作品　美枝子
骨壺へ五尺のからだが変り果て　一声
散歩から手折った萩をつぼへいけ　伊久野
滝壺へせい一杯の声を上げ　良江
お茶会に行儀見上げて居る茶つぼ　拙望
楽隠居古山の壺を自慢にし　保
子の思うつぼにはまってやった笑み　三平
つぼがまだ腹に入らぬ稽古三味　のぶ子
名月へ隣のいもの試食会　正雄
大臣の答弁横でささやかれ　久米雄
だんご米大事に仕舞虫が食い　幸仙

川雑　**土佐支部句会**（高知市）

川竹松風報

出産にもう助産婦の笑い声　天花
初孫が笑うた泣いたで皆を呼び　勝子
本心を語るチャンスを又逃し　呑洋
本心は妬いている妻の言葉尻　勝喜
本心を秋の夕陽に見つけられ　紅雨
本宅にない新調の二号宅窓花　
新調があってPTAが好き馬風　
新調へ犬遠慮なく飛びかかり　松風

勝負師としての悲劇がそこにある　大破
二次会へリボンをつけてなだれ込み　古城
わが道を歩き人生こせつかず　蟠蛇
障子紙ぽつぽつ売れる秋が来る　俊一郎
レヂー打っ指器用な小商人　未遂
停電がまだつづいてる街外れ　羅春

## 丸紅川柳句会（大阪市）

村田瓢太報

子の惚れた帯に短かき嫁をとり　巴子
肩こりへもう若いなど言うとれず　美幸
肩こらぬ同志で呑んで旨い酒　瓢太
自信満々ライバルの事もほめておき　一代
新幹線で見合したいと現代娘　扇里
畳の目数え見合の点かせぐ　睦子
「会うだけ」と会って見たのが今の妻　義児
世界一のプール作って旗一つ　素女
国境を越えて拍手がなりやまず　泉睦
土建屋が儲けてオリンピック終る　立児

## 南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

聖火リレー雨がふっても消えぬかな　和俊
下座から出た本調子見直され　鳥荘
社の車休暇にかりるハイウエー　宏子
ハイウエー借りた車で肩がこり　泉秋
ハイウエー事故もスケールちと違い　圭水
ハイウエー天まで続くように見え　和郎
ばあさんはあの世が恐いハイウエー　玲人
ハイウエーデートの風がさっとゆく　宏子
ハイウエー殺人犯も走ってる　和郎
ハイウエー成金趣味が走っとり　同
ハイウエー交通マヒを忘れさせ　圭水
ハイウエー私の車ははずかしく　同
ハイウエー新車うりこむ種になり　宏子
ハイウエーネオンの海を泳ぐよう　同
ハイウエー今さら中古がうらめしく　狂二
ハイウエーここらあたりは古戦場　和郎
ハイウエー彼女に腕の見せどころ　泉秋
ハイウエー又あちらでは手を聞かされる　路郎

## 諫早川柳会（諫早市）

川岡霊眼子報

最高のえくぼとなって角隠し　破竹
紅い灯のかげにえくぼのおとし穴　茶坊
どたん場で笑いながらに出たえくぼ　万象
毒になるえくぼが頬にある二号　霊眼子
可愛いいと云われてえくぼ深くなり　良隆
あらまあと目にものいわせ片えくぼ　夢天
平凡な顔にえくぼが魅力的　筆染
吾妻のえくぼに疲れ消えうせる　随心
移民船霞む故国へ汽笛鳴る　破竹
南米と涙で結ぶ紙テープ　正義
大海の潮しずかにドラの音　夢天
子が出来て別離ためらう夫婦仲　峯子
今別れすぐに逢いたくなる夫婦　卓二
夏の日の別離は傘の中で泣き　霊眼子

## あすなろ川柳会（大阪市）

山本素郎報

だしぬけに訪えば化粧もせずあわて　景達
ひかえめに焼香を待っ謎のひと　一枝
カミソリの手を止めさせて大クシャミ　弓彦
幸せな頃を写真屋まだ飾り　慶之助
ブレーキを利かすつもりの妻の酌　百酒
ひかえめと言いつっ飲んでトラになり　酔泉
釈迦如来ナップザックの娘にも逢い　恵美子
方言につられてみやげ買わされる　尤三
ブレーキの利かぬ同士が飲み始め　福郎
かけひきも覚え一度は退いておき　ゆきを

室生寺にて

葉がくれに見える五重のシルエット　水邦
国宝の暗さに馴れた仏たち　素郎
また元の金の話になる夜長　好郎
低気圧きっちり折は提げてくる　梅里

## 日の丸川柳会（鳥取市）

河村日満報

文化作品展参加

眼鏡ごしも紹介状に一変し　ト天
旅行客の足を止めてる松葉ガニ　茂人
共稼ぎ社の食堂で顔が会い　多加子
又明日も見舞にくるというお世辞　定人
常連の客でマダムも中へ割り　同
客引きのサービス品だけ売りつくし　朱雀
社員章わすれ顔パスきかしとき　月光
社員旅行どじょうすくいで見直され　すが子
面会に来る度白髪の多き母　同
会社員ですと職種まで云わず　蒼水
新社員背広の胸を張って見せ　道子
明日明日明日待ってる明日のながい事　静夫
客扱いされたも入社二三日　同
ホステスの嘘へ明日また来ると嘘　三鈷
嫁ぐ娘の明日はお客で来る門出　濁歩
時計まで間のびした音事務所ひま　芳道
紅葉狩りなど縁遠いデスクに居　多可志
まねかざる客が幹事をあわてさせ　三歩
紅葉客一枝さげて唄で下り　新雪
忘れ物時計はずしたまで覚え　吾柳
一徹が着物にも出る父の肩　日満

## 城北明老会（大阪市）

田中風柳報

大根足ショートスカート気にもせず　濁水
サービスの良さが予算に足を出し　風柳
年取って足に感謝をする気持　久子
ピッチャーの足引っぱった内野陣　清志
足弱が勝手な時は良く歩き　喜久
気を許した男に見せる足の傷　弘村
足洗おうと思ふ競馬は勝続け　富士
若妻の素足に残る座りだこ　源川
寿司屋さん高い足駄で配達し　芳
酔ばらい御気嫌なための千鳥足　繁子
利久下駄素足ではいていきなこと　清江
メートルを上げたばかりに足が出た　一登
塗り下駄の素足は八の字に歩き　美代
物言いが付いて足跡見直され　一登
足も手も出ぬ蛸壺に入る蛸　生仏

○

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店　大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL（六二二）三九三五番
（六二二）七七八二番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街
TEL（六二三）〇一四七番
串の店　南区畳屋町三ツ寺センター
TEL（三二）九一八四番

# 柳樽室

路郎生

★冬将軍がやって来た。防備におさおさ怠りはないが、うまく防ぎ切れるか、どうか。元気だ元気だと言われているが、からだの部分品が相当破損していることを思うと、いつまで持つやらあてにならない。まだまだ、したいこと、書きたいことが沢山残っているので、虫のいい話だがもう少し生きのびるつもりだ。よろしくご支援が願いたい。★大阪文化祭の川柳大会は大阪府市が実行委員会を作るまでに漕ぎつけたので、どうにか、私の責めだけは果たした。関西短詩文学連盟の作品展まで手が伸びなかったので本年は見送ることにした。この点若い人たちの発奮をのぞみたい。★古川柳の研究方面は人数は少ないが年と共に盛んになって来る。「川傍柳初篇研究」の努力は堂々一九六五年へ続く。★古川柳研究の第一人者、富士野鞍馬氏は来年度は「川柳太平記」を発表されるそうで、既に新年原稿が届いている。その意欲の旺盛さは壮者を凌ぐものがある。★新潟大の教授阿達義雄氏は独壇場とも言うべき「川柳江戸と紋章」を本号から寄稿して好事家をよろこばすこととなった。

★新川柳方面の作家は意欲の盛んなわりに、視野が狭く、足が地についている作家が少ない。その点、春三氏などに教えを乞う必要があるだろう。川柳界が他の短詩型文学に伍して一段と飛躍するは何時の日のことか、新人よ出でよと叫ばざるを得ない。★歳末が近ずくのはいいが、恒例によって郵便物がモタモタするのでは困る。過日郵政大臣が、ことしはうまく行くようなことをPRされていたが、年末年始の郵便物だけでも誤算のない仕事ぶりを見せていただきたいものだ。★終わりに、ご支援の諸氏や愛読者諸君が、よい年を迎えられるのをお祈りする。


## 柳人交歓年賀広告を募る

川柳雑誌社

新年号へ
あなたの年賀広告を

★一口金三百円。
幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月七日着便。

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）


## 社の黒板

★河野春三氏が一身上の都合で東京住まいとなられるので編集部を辞された。従って同氏担当の「人生譜」は現在募集中のものの発表かぎりで打ち切ることになった。しかし、社友として随時の寄稿はいただくことになっているのでご諒承を乞う。★北川春巣氏は永らく「近作柳樽」を路郎主幹と共選されていたが、今回「方円帖」新設と同時に、氏が担当されることとなり、氏の円満な選句により新境地を開かれることと思う。盛んに投句が願いたい。★川村好郎氏は北川春巣氏のあとを襲うて、「近作柳樽」を路郎主幹と共選されることとなった。これまた好郎の持ち味が多分に出ることと思われるので大いに投句ありたい。

**★川雑支部句会——十二月**

**★明和研究句会**・13日・一時、題、木枯し・二次会・片親、所、阪神鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、**★京都句会**・16日（水）夕、題、氷雨・含む・抵抗、所、四条縄手仲源寺、**★南海電鉄句会**・17日・（木）六時、題、退職・脈・世界一、所、難波高架下親和クラブ、**★阿倍野句会**・20日（日）六時、題、てこ・ラスト・へらず口・ぎりぎり、所、阿倍野区松崎町三の一〇割烹大萬、**★玉造句会**・10日・（木）六時三〇分、題、詰る、・鼻水・ハッピーエンド、所、市電玉造南一〇〇米大阪信用金庫、玉造支店**★宇部句会**・6日（日）夜、題、男・やりくり・古枯・綿入れ、所、富士食堂


川柳雑誌社主催

## 本社新春句会

日時　一月七日（木）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）電話四一四七八番
　　南区千日前電停東スグ北側
兼題　「しつけ」二句　麻生路郎選
　　「逢　う」三句　菊沢小松園選
　　「一本槍」三句　戸田古方選
　　「首　相」三句　吉田圭井堂選
　　三題当日発表
席題　麻生路郎
柳話
表彰　昭和三十九年度不朽洞賞優勝者
　　一ヵ年間本社句会全出席者
短冊交換会：有志の方は各自一葉ご持参
星賞　各題天位・各題天位を路郎選により天位に不朽洞賞。
会費　百円
★投句だけの方は郵券三十円封入（〆切は一月五日）本社宛。

麻生路郎著　好評噴々

# 川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

（毎日新聞評）
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。
句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

# 句帖

## あなたの句帖が再版されました

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい

一冊八〇円（送費二〇円）

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五丁目二五
電話　大阪（671）6081
振替口座　大阪七五〇五〇

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

新発売

キャップのない万年筆
スピーディな《ノック式》

パチロット
キャップレス

3,000円


## 募集

### 課題吟募集

君が代　西尾栄選（十句以内）
押売り　田垣方大選（十句以内）
見送り　辻圭水選（十句以内）（十二月十五日締切）
金儲け　菊沢小松園選（十句以内）
腰　野村味平選（十句以内）
奥さん　西出一栄選（十句以内）（一月十五日締切）

### 毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）　麻生路郎選
方円帖（雑詠十句以内）　川村好郎選
川柳塔（雑詠十句以内）　北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）　麻生路郎選（十二月十五日締切）

### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」「方円帖」は誰でも投句が出来る。
▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。


B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　三十九年第十二号
定価　一二〇円（送料六円）

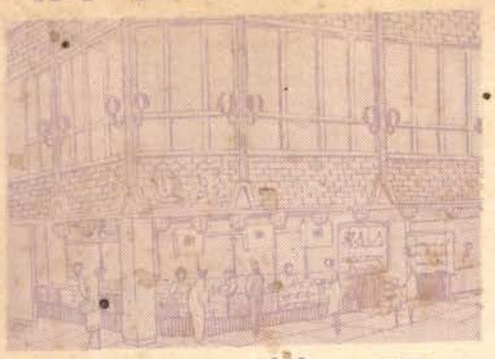
（禁転載）
半カ年　七五六円　〒共
一カ年一、四四〇円　〒社負担
昭和三十九年十一月廿五日印刷
昭和三十九年十二月一日　発行

編集兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地

発行所　川柳雑誌社
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

Printed in Japan

# 豚饅・焼売



広東料理

蓬莱

大阪なんば

TEL (641) 0551～2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店

# 貫禄は充分です

樽で貯蔵しはじめてから40年…
まろやかな味！
ふくよかな香り！
すべてが完璧なウイスキーです。

サントリー

世界の名酒

サントリー

ローヤル三、〇〇〇円　オールド一、六〇〇円
角瓶一、三二〇円　白札七五〇円

倉敷紡績

！洗う…
乾く…
すぐ着られる

東レテトロン 65%
高級綿 35%

クラボウ
テトロンシャツ

諸製品　クラボウテトロンブラウス

国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る

国際観光旅館

うおまたろう
魚又楼

TEL 和歌山④ 0431・0387